甘さは人の為ならず

ネコ削ぎ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界最強の称号。ブリュンヒルデの名を冠する織斑万春はお菓子作りに目覚め、お菓子を通して友情を広めていく。弟の一夏がＩＳを動かし騒動に巻き込まれ、妹の千冬がＩＳ学園教師として猛威を振るい、当の万春はお菓子作りに精を出す。とにもかくにも家族と甘いものに手を出してただで済むと思うなよ。

目次

だから洋酒入りのお菓子は作らない　1
アナタのその甘さ……嫌いじゃないわ　9
私にツン甘味にはデレデレ　17
友情は甘く煮てもよいではないか　24
食べられるのなら食べてみたいじゃない　30
戦いなんてくだらない……私のお菓子を味わって　35
甘い考えで動いてみた　40
彼？との意思相通はできるのか　46
求められるから嬉しいのだ　52
だから甘ちゃんなんだよ　58
三人寄らばなんとやら　64
それぞれ　サーチあんどデストロイ　69
きょひなんですけど　77
会議は踊らずだから進まず　85
怪しい雲行き　94
それぞれ　試合開始　98
それぞれ　3＋4＋5は？　106
それぞれ　3＋4＋5＝1には遠く。　116

織斑姉弟 ―――――― 121
秘密は甘く妖艶な響きに聞こえたり 126
私は面倒が嫌いなんだ ―――――― 132
姉として色々不安 ―――――― 139

だから洋酒入りのお菓子は作らない

世界は広い。それはもう広い。ランチマット程度じゃ足りないし、絨毯でさえ面積不足なのだから人の手に余る代物だ。

そんな世界には何十億もの人間が暮らしている。そのうち土地が埋まりに埋まって宇宙開発が発展しそうなほどに増えていく人口。まったく歯止めがきかない様を見れば、もしかしたら戦争が人口バランスを取っていたのではと思ってしまう。

勘違いされたくないけど、戦争肯定派の人間ではない。ただ一つの考えを述べたにすぎない。

戦争と言えば、私たち現代人にしてみれば社会生活そのものが戦争みたいなものだ。

学校でも就活でも会社でもプライベートでも誰かよりも高く豊かにと争っている姿は戦いと呼ばずになんと呼ぶ。それが世界中で行われていれば戦争だ。

戦いなんて多大な労力だ。腹が減っては戦はできないとか言われるほどにエネルギー消費が激しい。

戦うことが愛ならばいいんだけど、基本その愛って自己愛だから始末に負えない。他者への偽りのない愛なら戦いも許せそうだけどさ。

戦いと言えば、誰しも苦手なことがあると思うのだけれども、やりたくもない様な苦手なことをやらなければならないときに戦いと表現することがある。私にとっては戦いなのよ、とか。

戦わずに生きることができればステキだが、世の中上手く回っているみたいで、良いことも悪いことも等しくやってくる。

たとえば、両親がいないのに弟を養っていかなきゃならないとか。

たとえば、親の庇護にいてもいい年齢なのに甘えられない状況とか。

たとえば、双子の妹がとんでもなく孤高で孤高でブラコンでめんどくさくなったりとか。

たとえば、妹の友人がとんでもなく自分勝手な天才であれこれ巻き込んできたりとか。

たとえば、弟がとんでもなく察しが悪くて、いつか無自覚ハーレム作りそうなシスコンだったりとか。

たとえば、友人の妹がほぼツンしかないツンデレで難攻不落の鉄の城染みた弟に恋してしまったりとか。

たとえば、弟を養っていくはずが家事がまったくできず、逆に弟に養われている錯覚に囚われてしまったりとか。

たとえば、友人の行動に巻き込まれたことで生活が成り立つ様になり、感謝すべきか悩んだりしてしまったりとか。

たとえば、気がついたら妹差し置いて世界最強なんて女捨てた評価を喰らってしまったりとか。

そう。世界最強だ。女子が求める肩書きじゃない。

しかし、現実は残酷だし小説より奇妙だ。

生活を潤すためだけに頑張っていたら国際大会で優勝して一躍有名になっちゃったのだから人生摩訶不思議。

周囲は憧れやら対抗心を燃やしてくるけど他に関心向けるところあるだろ。暇なのかね。

こっちは二回目の世界大会に参加しなきゃいけなくなったんだけど、最近目覚めたお菓子作りが忙しいのでそれどころじゃない。もっと味よく、もっとレパートリーを増やしていきたいのだ。

前回作ったクッキーは中々の出来だったし、千冬も一夏も美味い美味いと喜んでくれたので、私としては更なる高みへ目指したい。

ＩＳとか世界大会も大事なんだろうけど、腕が鈍らない様にするので手一杯だ。そんなドンパチ大好きじゃないし。

だけどさ、周りは戦っている私しか知らないからお菓子作りが趣味ですと言っても信じてくれない。

それどころか、戦いこそが至上、家事なんか一切出来ない戦闘マシン扱い。それも面と向かって言われた。泣くぞコノヤロー。

まぁ……家事が出来ないのは本当だけど。お菓子作りに目覚めてなければ正しく戦闘マシンだったり。案外正しい評価じゃないか。

ちょっと悲しくなったけど、クッキーが美味しいので許す。美味しいから大丈夫だ。美味しいは正義なのだ。

「ちょっと他人の控え室に来てまで菓子を食べるのはどうなのサ」

甘くて美味しいものを食べるのに場所なんて選ぶ必要なし。フィールドを選んでちゃいつまでたっても食べれないじゃないか。

「それもこれから決勝戦なんダ。よくも緊張一つ引っ付いてない顔で菓子を食べれるのサ」

アリーシャ・ジョセスターフ。決勝戦が近くてピリピリしているのは分かるけど。そこまで攻撃的になる必要ないと思う。きっと甘味が不足しているから余裕なく見えるのだろう。

手作りクッキー。けっこうな自信作なので感想聞かせてもらえると嬉しかったり。

「声が小さいヨ。まったく世界最強の称号を持つ者とは思えないサ」
声が小さいのと世界最強は関係ないと思うのだけど。それよりも甘いのどうぞ。
「試合前に敵から物を受け取ると思うかネ。戦う前から試合が始まっているのだから、そのクッキーに何か仕掛けられていても不思議じゃなイ」
その何か仕掛けられてそうなクッキーを食べる私はなんだろうね。
「……まぁ、これからこれから私が倒す世界最強が卑怯な手を使わなきゃ勝てないなんてことはないさネ。一つもらおうカ」
はいどうぞ。美味しいよ。
「ちょっと甘すぎる気がするがネ。悪くはないと思うヨ」
うん。感想ありがとう。勧めておいてなんだけど、手が止まらなくなってるよ。
「いっぱい作る方が悪イ」
理不尽だ。作り過ぎたのは自覚しているけど、それにしても一つ味わっては次のをひょいっと口の中に入れて、なくなればまたひょいっと。作り手としては嬉しくて仕方がない。もう決勝戦負けても悔いなし。
多く作ったクッキーが見る見るなくなっていき、アリーシャが一つ一つをよりじっくりと味わう。また作ってこようかな。
決勝までそう時間もなくなってきた頃に控え室の扉が勢いよく開く。ノック一つな

く開けられるものだから私たちはびっくりして残り少ないクッキーを床にぶちまけてしまった。

「ああー!?」

嘘でしょ。せっかく作ってきたのに。

「うくくぅ……なんの用だイ。他人様の控え室に断りなく入ってきて」

アリーシャが不機嫌そうな顔で立ち上がるが、突然入ってきた日本政府の人間と見知らぬ外国人に押しのけられてしまって文句を言いきることもできずに黙ってしまった。

日本政府の人間は焦った顔をしている。青い顔だ。何かあったみたいだ。

「織斑さん。おちついてきいてください」

聞かされたのは弟の一夏が何者かに誘拐されてしまったというもの。会場で一人になったところを狙われたらしい。居場所の特定は現在行っているそうで、見知らぬ外国人はＩＳ世界大会の会場があるドイツの軍人だった。

あれ、なんで攫われちゃってんの。千冬は何をやっていたのかな。私が一夏を見ているから、姉さんは試合に集中してくれ、とか言ってなかったっけ。テロだろうが一夏に手を出す奴はぶっ殺すとか強気な発言してなかったっけ。

「というわけですが織斑さん。こちらは我々に任せてください。なんとしてでも弟さんを救出します。このまま決勝戦を」

日本政府の人間が何か言っているけど。私にとっては大会捨ててでも解決しなければならない事案だ。決勝戦なんてできるわけない。

決勝はでない。棄権するので伝えておいてください。

「な、なにを言ってるんですか」

焦られても、一般的な感覚を持ってたら分かるでしょ。なに、私が戦闘最優先のバーサーカーかなにかと勘違いしている奴でしょうかね。

「なら私も棄権しようかネ。ブリュンヒルデのいない大会で優勝してなにが楽しいやラ。聞いてしまったよしみダ。私も手伝うさネ」

控え室を出ようとしたらアリーシャがついてきた。なんかやる気に満ち溢れている。

そのまま残っていれば優勝だよ。

「そんな優勝に意味はないサ。ま、クッキーをもらったんダ。そのお礼ということデ」

この事案とクッキーじゃ割に合わない気が。

「それを判断するのは私だヨ。ついてきているのはつり合いが取れているからサ」

うん。じゃあそういうことにしておく。

「パパっと片付けるサ。ストレス発散も兼ねてネ」

誘拐犯たちには悪いけど。五体満足では帰せないところまで事態が進んだようだ。アリーシャやる気だし、私もクッキーを台無しにされた腹いせも乗っけているから覚悟

しろ。

あとついでにヘマした千冬には延長ありの説教をしなくちゃいけなくなったな。

誘拐犯たちはボコボコ。アリーシャと私とで突撃してその場にいる全員を叩きのめして一夏は無事に救出。トラウマものの体験だったんだけど、一夏はずっと眠らされていたので、眠っている間に何もかも終わって気づいたらドイツの病院で目を覚ましたという状況。攫われたことだけ覚えているらしいが一瞬の出来事なので問題なかった。

私としては弟を守ると豪語しておきながら、会場で試合開始までの間に黒ビールなんてものに手を出して前後不覚に陥って役に立たなかった素敵な妹のほうが問題だった。しばらく酒類は禁止にするとして、さて何時間説教すれば反省してくれるかな。

アナタのその甘さ……嫌いじゃないわ

世の中は人間の手に余る事柄で満たされている。いっぱいいっぱいでどの手綱を握れているのかも分からない。

そもそも人間のコントロールが行き届いている何かがあるのかも知らない。操っているようで実は操られていたとか言われても驚かない。

自然現象に振り回されているだけでなく、自分の内なる感情の動きにも振り回され、自分をコントロール出来ていない人間が思い通りに事を運ぶのは無理。

弟を養うために頑張っていたら世界最強になってたし。

弟はテロに拉致られる経験を得てしまったし。

私の双子の妹は酒で失敗シテシマッタシナァ。

そして私は決勝戦を棄権して独断で弟の救出をしてしまい、ＩＳの世界大会の開催地プラス警備を頑張っていたドイツの面目を潰したとしてドイツ軍の教官をすることになった。

何を言ってるか分からないと思うのだけれども、私にだって分からない。

そもそも教官のやることが判明してない。

指導なのかな。

何を指導すればいいのかも分からないし、受け持たされた黒兎隊からは歓迎されることはなく、いきなり荒々しい歓迎をされることになった。

さすが軍人強かった。

黒兎隊はＩＳ運用を目的とした部隊なので女子しかいなかったが、並の男子では太刀打ちできないほどに強い。

やはり国を人を守るためには強くならなければならないのだろう。弱いことは付け入る隙を与え、全てをグチャグチャにされてしまうのだから。

私も弱いことこの上なく、新作の甘味が店に並ぶと、財布の中身と相談することなく買ってしまう。甘いものが強すぎて勝てた試しがない。いっそのこと永遠に負けっぱなしでもいいかも。だって甘いものは正義だし。

強くて頼りになる黒兎隊に教官なんて必要ない気がするけど、約束は約束なのだから頑張らなければ。

「よろしくお願いします」

今日も元気な挨拶からは始まる。何事も挨拶が大事だ。

声が小さい。

「……織斑教官。聴き取れませんでした。大きい声でお願いします」

黒兎隊副隊長クラリッサ・ハルフォーフ。彼女の言葉が痛い。熱血系教師みたくやったのは失敗。

無理。声帯がズタズタになっちゃう。

「弱すぎです。鍛えましょう」

そ、そんなことよりも訓練はじめるよぉ。

「逃げましたね」

「逃げましたよ」

「逃げてんじゃねーぞ」

「攻撃開始!!」

黒兎隊ほぼ全員が一斉に襲いかかってくる。訓練なんて何すればいいか分からないから、とりあえず組み手をする。

ドラゴンスープレックス。

「ギャー!?」

キャメルクラッチ。

「裂けちゃうぅぅ!?」

カナディアンバックブリーカー……クラリッサもしかして太った？

「なんで私だけ!?　なんで私だけぇ!?」

昨日、訓練終わりに皆に食べてもらおうと思ったお菓子が減ってたんだよ。
「間違えではないですか!?」
間違えじゃないんだな。貴女が摘まみ食いしたことは隊のメンバーから聞いてるんだから。
「裏切り!?　仲間を、それも副隊長を売るなんて!!　それでも黒兎隊か!!」
言ってることが負け犬ならぬ負け兎なクラリッサを皆が白い目で見ている。私にも向けられているみたいでヘコむ。
「皆平等に食べたいのに」
「副隊長だけ余分に食べてる」
「ずるい」
「だから太るんだよ、デブ」
「最後の奴ぅ!!　テメーは私を怒らせ……背骨がぁおれりゅうぅぅぅ!?」
今はこっちが怒っているんだけど。
クラリッサを処刑し終わったら、残りのメンバーと組手をして終了。
訓練の内容が思いつかなかった結果だ。
とにかく実践形式での訓練。黒兎隊全員で私に有効打を一撃でも与えられたら勝ち。実にシンプルである。

毎日のように行われる訓練だけど、私からしてみればおやつの時間までの軽い運動程度の認識だったりする。

ドイツに留め置かれ訓練なんてしなければならないなど地獄以外の何物でもなかったが、現地のお菓子を堪能できる幸せがあれば乗り切れてしまう。

もちろん食べるだけでは満足できずにお菓子のレシピ本も購入。

あとは作って食べるだけ。そう思ってレシピ本を開けばびっくりドイツ語しか書かれてないから解読不可能。

そういえばドイツだね。無理だね読めないね。

じゃあ黒兎隊の皆に解読を頼めばいい。誰もがお菓子作りなんてやったことないらしいけど、お菓子作りで隊の連携をより強固にできそうだから強行してみた。

結論としては部隊内での距離感は一名を除いてだいぶ縮まったのだからお菓子は偉大だ。

「万春教官から見てボーデヴィッヒはどうですか」

訓練も終わり、黒兎隊のメンバーで恒例のお菓子作りに精を出していると、一緒に作業しているクラリッサが声をかけてくれる。

話題は隊の問題児、ラウラ・ボーデヴィッヒのことについて。

甘いものに興味がないなんて人間としてどうかしていると思うよ。

「教官の超個人的な感想はいりません」
　酷い。聞いたから答えたのに。
「真面目にお願いします」
　はいはいはい。そうだね、力しか興味のない馬鹿かな。まさしくパワー馬鹿だと思うよ。
「パワー馬鹿ですか」
　そう。力こそが全てと勘違いしている子供さ。単純な力で敵に打ち勝つことはできるかもしれないけどね。そうやって打ち倒すことで勝利以外に何か手に入れられるかな。
「勝利以外ですか。あまり思いつきませんね」
　じゃあ、きっと何も手に入れられないんだよ。
「ああ、しかし最近アイツは増長してきました。千冬教官の指導を受けてめきめきと実力をつけてきているようですから」
　今回の騒動の原因の一人としか言いようのない千冬をドイツ軍の教官にと巻き込んだ。カッとしてやった。反省はしていない。反省することがないから。
　一夏一人を日本に残すことは忍びないが、ブラコンな千冬にはこれくらいの罰が必要だから、一夏には我慢してもらおうか。

しかし、千冬は誰に知られてない才能を開花したみたい。教官としてラウラを指導していけば彼女は確実に強くなっていき、ついには部隊長のクラリッサにも打ち勝っていた。

「いいですよ。隊長じゃなくても。いいですもん」

めっちゃ気にしてる。クラリッサ明らかに不貞腐れている。

だけど、クラリッサの支持率は高い。力だけを柱に踏ん反り返り周囲を見下すラウラに好感を持つメンバーは一人としていない。

不貞腐れるクラリッサはきっと甘未が不足している。甘いものは人生に幸せをもたらしてくれるからグミでも食べてごらんなさい。

「ありがとうございます。甘くて美味しいです」

元気になったね。

千冬は千冬でラウラばかりに構いっきりはよくない。最近のラウラは自分が選ばれた者だと選民的な思考回路になっていて何故か私のことを鼻で笑ってくるんだけど。

教えようとしていることが単純な力でないことは姉として理解できるけど、まさかの全然伝わっていないから誤解なく分かりあうって難しい。

これからが大変だよね。

「もぐもぐ……万春教官が一発シメればいいと思うのですが」

私を戦闘大好き体罰歓迎なバーサーカーか何かと勘違いしてないかな。
「……カナディアンバックブリーカー」
あれは訓練だからノーカン。別に訓練以外で手は上げてないでしょうが。
「そういえばボーデヴィッヒがお菓子なんて軟弱な奴が食べるものだと吐き捨てていた気が」
久しぶりにラウラを訓練に招待しよう。腹の底から煮えくり返る想いを全て開放してでも、一度徹底的に打ち負かして天狗になった鼻をへし折って上には上があることを教えなきゃ。
そして甘いお菓子は正義であることを物理的に説得しに行きましょうか

私にツン甘味にはデレデレ

何人たりも自らの生まれは選べないものだ。選べるようなら誰だって一生働かなくていい具合の金持ちパパママのところに生まれたいはずだ。

選べる生まれにおいて、進んで貧困な家や、厄介事を抱えている家に生まれたいとは思わないだろう。

全てが平等になど有り得ない。不平等が世界を世界らしくしている設定。平等であれば、誰も比べやしないけど自分と他人の区別すらつかなくなるんじゃないか。

世の中は常に平等であったためしがないのは当たり前だ。文句言うのは勝手だけど最後には受け入れていくしかない。

私だって不平等を嘆いたことがある。酒飲まなきゃやってらんない、なんて自暴自棄になって酒飲んで全力リバースしたけど。酒はお菓子みたいに美味しくも甘くもないから嫌いだ。

姉として頑張りたかったのに、炊事が致命的には下手で一夏に丸投げする羽目になったときは、自分の才能を呪ったものだ。

代わりに日常のどこで発揮すればいいのか分からない戦闘能力が授けられちゃった

が、ＩＳが世に現れなきゃマジ要らない力となっていたことだろう。
日常に役立つ能力がいい。必要なのは現代を生き抜く力だ。戦乱の世でしか使えないものは捨てたくなる。
不平等を嘆くの終わり。家に帰ろう。
ドイツの甘味は粗方堪能したし、レシピ本は買い揃えた。言語は分からなかったが、クラリッサたち黒兎隊の力を借りてドイツ語は読めるようになった。
本当は日本語訳書いてもらいたかったんだけどいつの間にかドイツ語講座を受ける羽目になって読み書きは出来るようになったというわけさ。
ちなみに会話は無理。発音が全然分からないし、流れるような会話は全く聴き取れない。
あまりの出来なさに、しばらく黒兎隊のメンバーが私とのやりとりに限りニヤニヤしながら筆談してきたときは全員お菓子抜きにしてやりました。
飛行機乗って日本へ。
やることもないからお菓子のレシピでも見てる。
しばらく時間を潰していたら、隣の席に篠ノ之束が座り込んできた。久しぶり。
「ハロー。久しぶりだね。まーちゃん元気だった」
見れば分かるでしょ。束ちゃんなら盗撮か何かしてた。

「してたよ。文句あんの？」

なぜ喧嘩腰なのかな、とかは今更か。

束は私を好いてはいない。理由は自然物と人工物が相容れないから。

自らをオーバースペックと恥ずかしげもなく高らかに宣言できる束を、ちょっとしたことでシメてしまったのが原因かもしれない。

一夏や千冬の為に丹精込めて作ったチョコレートを摘まみ食いどころか全部食いしたあげくの感想が「コンビニの買って食べた方が早くない」だったことでシメてしまったのが原因かもしれない。

それからちょくちょく人が目を離している隙に盗み食いを働いてくるために余分に用意するようにしたら、別に求めてないからと摘まみ食いしながら言われたことに、ちょっと嬉しくなって頭撫でたのが原因かもしれない。

常に自分こそが最高で最強の存在だと豪語してやまず、他人を超が付くほどに格下扱いしちゃっている束を、フィジカル面に限って上回ったことが原因かもしれない。

ふむむ。心当たりがありすぎて困る。

分からないから今は結論を保留しよう。どんな事情を抱えていたところで、千冬の唯一唯一唯一の親友であることには違いないのだから。

「それにしてもモンド・グロッソ二連覇ならず。いや～、まーちゃん惜しかったね」

あんまり惜しくはない。優先順位は圧倒的に一夏だから。

「ふーん。人工物のくせに変なこと言うね。ちーちゃんやいっくんが言うのなら分からないでもないけど」

変わらずの辛辣。お菓子のあげるから機嫌戻してよ。

「もらっておくよ。別にお菓子が欲しいわけじゃないんだからね。小腹が空いていただけなんだからね」

はいはい。そういうことにしておくよ。

お菓子を頬張る束を見ると和む。とても女性的な肉体を持つ束は男性の目をくぎ付けにできる胸を持つんだけど、普段の言動のせいかとても子供っぽく見える。

実際に子供だと思う。何を考えているか分からないところとか、ただ世界を驚愕させるためだけにＩＳを作り上げたところか、宇宙で活動するために作ったとその場でテキトーな理由を言ったりとか。

子供っぽい。

でもサイコなところもあるから無邪気な子供じゃない。邪気な子供だ。

例えば、自分よりは劣っているから仲良くできると千冬や一夏を友達と認識しているくせに、並みでしかないと自分の両親を血のつながった他人程度の認識をしていなかったりだ。

それでも妹の箒には愛情を注いでるから分からないものだ。

「あのさぁ、まーちゃんはなんで生きているわけ」

突然酷いこと言う。

「だってさ。まーちゃんなんてちーちゃん以上にこの世界で必要のない存在じゃん。その異常な戦闘能力なんて異質でしかないよ。それも出自を考えればアウトもの」

お菓子で口の中もごもごさせながらこっちを全否定。

確かに私はそういう人間だから仕方がないかもしれない。今の世の中に圧倒的な暴力なんて役に立てられる場合なんて限られている。アメリカとかのアクション映画の中でならなんとかなりそうだけど、平穏な生活をテロで崩されるような世界観は嫌だ。

世界が必要ないとかはどうでもいいとして、私は自分の力の及ばない範囲で楽しめているから生きててもいいかな、と思うよ。

「自分の力の及ばない範囲？　ＩＳでの戦闘はどう見てもまーちゃんの力の及ぶ範囲だよ。何かな、頭おかしくなっちゃった？」

ＩＳは別に楽しいとか楽しくないとか考えたことないから切り捨て。私が楽しいのはお菓子作りかな。ああ、食べるのもね。

「ふーん。平凡でつまらないことを楽しんでるんだ」

そうかな。私からしてみれば束のやっていることの方がつまらなく感じるけど。

「かちーん。天才束さんのやっていることが分からないなんて凡人の悲しい性だよね」
そう。人外だけど凡人だから私は。作ったお菓子を美味しそうに食べてもらえるだけで世の中は嬉しく楽しく思えてしまうんだよ。だから今この瞬間も楽しくてしょうがない。束も美味しそうに食べてくれるからね。
「この顔見てそう思えるならめんたまくり抜いた方がいいよ」
じゃあ美味しくないの。それならお菓子の摘まみ食いや盗み食いをやめてもらえる。それに今食べているものも吐き出してくれないかな。美味しくないのならね。
「うぐぐ。うぐぐぐぐぐ」
変なうなり声だ。ただ、私を嫌っているわりにはお菓子を吐き出すことはしない。悔しそうに顔を歪めはしても、お菓子の魔力には勝てないと見た。いつかこの顔を甘さの幸せで緩ませてみたかったりする。
「べ、べつにこんなお菓子美味しいとは思わないよ。でも束さんでも口に入れているものを吐き出すのが行儀悪いことは知っているから、吐き出したい気持ちを我慢して仕方なく食べてやっているだけだから。こんなの美味しいなんて思えないよ」
うん、可愛い。
必死に言い訳を口にしているところが可愛い。
しばらく堪能しているとしますか。

束はお菓子を食べ終わるとそそくさといなくなってしまったが、私としては飛んでいる飛行機のどこから入り込んでどこから出ていくのかとても気になったと言っておこう。

友情は甘く煮てもよいではないか

孤独は人を死に至らしめる。独りで生きることは自分たちの命を短く終わらせる行為に他ならない。

人間は一人一人違いがあり、その違いがあるからこそ個人として認識されるものである。

全てが同じであればそれは鏡合わせでしかなく、自分と他人を分ける境界線もなにもありはしない。

その結果は個人の消滅だ。同じものしかなければ他人を認識することもできないのだから。

みんな違ってみんないい。素敵な言葉だと思う。

全てに違いがある個人は集団でしか生きられない。

個人の反対は社会。

そして人間の生きる土台は社会である。

社会は人間が必ず築き上げるもので、私たちはその中でしか生きることができない存在でしかない。日々の生活を振り返ってみれば分かることだ。

たとえば私が超が付くほどの孤独で友達一人いない奴だと仮定してみよう。仮定だ。決して事実じゃないから。

そんな孤独（事実ではない）な私がテキトーに料理作って食べるとする。

料理……はできないこともないけど得意じゃない。一度本気で作ってみたことあるけど、千冬からは酷評され、一夏からは全て分かっていると言わんばかりの苦笑いをもらって二度と作るものかとこの前誓ったばかりだったり。というか千冬の奴もできないくせにさ、なにあの勝ち誇った顔。

料理を作ろうとすれば食材が必要になるし、調理には調理器具が欠かせない。

それらは店で買うなりすると思うけど、誰かから購入することに繋がることになるわけであって、自然発生しているものを自力で取ってきているわけじゃない。

誰かの何かをもらっている。

この時点で私の孤独は成立しなくなる。だって他人との繋がりで生きているのだから。

孤独に生きることの難易度の高さ。全てを自給自足でなければならないのだから今のご時世ではできるわけもない。

極論なんだけど。

世間一般的な孤独はボッチのこと。

苦楽を分かち合う仲間がいない人生なんて甘くないお菓子とおんなじだ。誰かと楽しむことができれば自分の感じた喜びは何倍にも増幅するし、誰かと苦しむことができれば互いに助け合って辛さも半減させられる。

孤独はそんな人生何千と経験するような苦楽に対して何にも変えられない辛い生き方だ。

だから孤独でいることは避けるべきだ。

天才とも天災とも言われる篠ノ之束だって千冬という友達がいる。あの誰にも理解されないような束にもね。

私にも友達はいる。いるよ。心友とも言っていい。

ＩＳの世界に入り込んで以来の付き合いを持っている友達。私という存在を明かしても態度変えずに笑いあえる。初めて友達っていいなと思ったほど。

お菓子作りを始めた時なんて、真っ先に味見させてくれなきゃ絶交してやるんだなんて脅してきたけど、束のつまみ食いのせいで友達の知らないところで実は絶交されていたりする。バレなきゃいいけど。

今日はケーキを作ってみた。当然ながら味見は友達にお願いする。

というわけで、はいどうぞ。

「おお。美味しそうじゃん。くひひ、涎が止まらんぜー」

作ったものが喜ばれる。一夏が料理作りを楽しんでいる理由が分かる。喜ばれると私も嬉しいね。

「じゃあじゃあお茶でも用意しなきゃね。残りの今日もこれで頑張れそうだよ」

篝火ヒカルノ。甘い物を前にして子供みたいにはしゃいでいるけど、お願いだからケーキ落とさないでね。せっかくヒカルノの為に作ったっていうのもあるんだから。

「まはにゃんのケーキなら落っことしても食べれちゃうぜー。舐めんな私」

舐めてない舐めてない。舐めてないけど、落ちたケーキも食べられると思わなかったからちょっと舐めてたかも。すげーな。

ケーキを手にいつまでもピョンピョンはしゃいでいる。

「んふふ。せっかくだからケーキの前にひと仕事終わらせようかにゃあ。まはにゃんが来てくれたしね」

私関係なくない。

「あるある。実は新型機が完成してね。テストパイロットが必要なの。まぁ、それだけならうちの人間使えばいいんだけど。データ取りの為に模擬戦を考えてたらフランスの企業が同じく新型機を開発したとかで、せっかくだから模擬戦しないかと申し込んできて」

なんでフランスなの？

「企業スパイが入り込んでるからじゃないの。どーでもいいけど」
どうでもいいんだ。
「まはにゃん以外のことはどうでもいいと思いまーす」
よくないと思いまーす。
「相手方のテストパイロットが元代表なわけ。ズルくない。どうみてもこっちの新型潰しにきてるよね」
潰しにきてるね。で、私がテストパイロットとして戦えばいいわけ。道理であちこち忙しいと思ったら。グットタイミングというわけだ。
「うん。そんなことで頼むにゃあ」
ヒカルノはひらひら手を振って気軽に押し付けてくる。何も準備していなかったけど、友達の頼みとあらば引き受けない選択肢はなかった。
ＩＳスーツを借り受け、新型ＩＳのデータを見せてもらう。
それが済めば早速模擬戦へと移ることになるけど、私を見るなり相手は驚きながらも不敵な笑みを浮かべて親指を下に向けて挑発してきた。嫌われることしたか。
なんでも第二回モンド・グロッソで五位の選手らしい。
なんでも世界最強を倒して自分こそが最強だと証明したかったらしい。
なんでも浮足立ってミスをしてしまい五位で終わったが、本当ならアリーシャなどに

決勝戦を譲るはずではなかったらしい。

なんでも今回は徹底的にぶっ潰してやるとのことらしい。

「……なに喋ってんのあの人。五位でしょ。最強からほど遠くないかにゃあ？」

ヒカルノ辛辣。

食べられるのなら食べてみたいじゃない

緊張はひとつもない。自分自身のことではないけれども、顔をみればすぐに分かってしまうのだから付き合いの長さを感じざるを得ない。あと、多大なる好意とか。

顔の作りは非常に織斑千冬にそっくり。そりゃあ一応双子なのだからそっくりなのは当たり前かもしれない。

でも雰囲気は全然違うね。

千冬の奴は堅物なんて言葉が似合いそうだね。よく刀とかに例えられるけど、確かに下手に触ると怪我させられそうなほどに冗談が通じないんだよ。危にゃいんだよねぇ、こっちは頭脳労働を専門としているところがあるのに頭ぶっ叩いてくるから。何度も何度も叩いてくるから困る。ちょっとアイツのＩＳに細工してやろうかと思っちゃったほどに困ったさ。冗談の一つくらい寛容になってくれないものかにゃあ。

それに比べてまはにゃんは全体的に柔らかい。

本人が甘いもの好きなところを加味してマシュマロみたいに柔らかい。やばい食べたくなってきた。ああ、もちろんマシュマロのことじゃなくてまはにゃんのことをだよ。決まってんじゃん。

と言ってもまはにゃんが柔らかくなってきたのはお菓子作りに目覚めたころからかな。それよりも前は柔らかいというよりもフワフワしているといった感じだったかな。ちょっと地に足ついていない感じ。冗談とかにもちゃんと応えてくれるんだけど、どっか壁があったかな。でも当時から千冬よりも好感は持てたよ。というか私としては出会った当初から友達だったよ。あ、千冬は知り合い程度ね。

まぁ、まはにゃんのバックボーンが意外にも重いことを知ったときには地に足ついてない理由が分かった気がして嬉しかったけど。

まはにゃんは生粋の戦闘マシンだったけど私には個性的な友達の認識。だって、今更になって戦闘マシン扱いできるわけないしさ。

それにお菓子作りに目覚めてからまはにゃんはストンと地面を踏みしめて生き始めたみたいだし。お菓子もちょー美味しいし。

私としてはまはにゃんは最高の友達なのさ。

そんな友達のコンディションなんて顔みりゃあ分かる。

個人的には友達ポジで終わっちゃあ困るんだにゃあ。

惚れてるんだよ。

愛したいんだよ。

特別な存在になりたいんだよ。

もうね、私が男なら合意の上でパコパコしているよ。だって可愛いじゃん。柔らかいし、甘い匂いがするし。

「性転換する薬開発したい」

うん。ＩＳスーツ姿は非常に興奮します。アレだね、甘いの好きな割にはスタイル抜群じゃないの。

私が欲望をぶちまけてしまったことでまはにゃんが首を傾げて「どうして？」と小声で聞いてくる。相変わらず常人を大きく下回る声量。可愛いじゃないの。

どうして、と問われたら赤ずきんちゃんの一幕を思い出す。どうしてお婆さんの口は大きいのみたいな。

「そりゃあもちろん」

お前を食べるためだよ。

「まはにゃんとパコパコしたいからだよ」

もうね。欲望が止まらない。嘘を立て掛けて本音を隠すまどろっこしさは要らないや。

あんまりに隠さな過ぎたけど、まはにゃんは冷静な顔して「パコパ……コ」と呟きながらも段々と顔が赤くなってきていた。あれ、脈ありじゃないかにゃあ。いける、この恋愛成就するぞ。

おうおう。こんな可愛い反応を見せるまはにゃんを自称最強の五位女の前に出すわけにはいかない。何か話題を変えて冷静さを取り戻させよう。

「ところで新型はどうかにゃあ？」

倉持研究所が開発した新型機。その出で立ちは鎧武者の如く。

まはにゃんは新型ＩＳを装着しながら「名前が被ってる」と一言。

「んふふ。まはにゃんの専用機の本来の姿を量産機として再設計した機体だからね。名前はまはにゃんのと同じ打鉄。正確には量産型打鉄といったところかにゃ」

まはにゃんの装着している打鉄は、まはにゃんの専用機である打鉄を素人でも扱えるように性能を変化させて量産仕様にしたＩＳ。

「まはにゃんのに比べるとだいぶ防御力は落ちちゃっているけど、その代わりに致命的だった機動力はかなり上昇しているから飛び回っての戦いができちゃうよ」

まはにゃんの打鉄は超防御型で重装甲が売りだったけど、この打鉄は防御型でしかなく一般のＩＳに比べて防御に重きを置いているだけ。素人でも扱えるようにしているからしょうがないけど。

でも機動力はある。まはにゃんの鈍重過ぎてデブ扱いされる打鉄とは違って、ビュンビュン飛び回って切り結ぶことだってできる。

うん、さすが倉研の新しい顔。まはにゃんの打鉄と千冬の暮桜のデータを参考にした

だけある。ちょっと普通過ぎてつまらないＩＳになっちゃった。
「さてさて。相手さんもお待ちだし、まはにゃん行ってらっしゃい」
手を振って送り出せば、まはにゃんは小さくもはっきりと「行ってくるね。終わったらケーキ食べよう」と言ってくれた。
そう、私にとってのメインイベントはまはにゃん特性のケーキだ。こんな勝つことの分かっている出来レースじゃない。
「残念です。マスコミがこの場にいないなんて。我がフランスの最新鋭機と敏腕パイロットの雄姿を公に披露できませんね」
管制室に向かえばフランスのデュノア社の職員がもう勝った気でいた。
「ああ、すみませんね。そちらとしてはこの方が良かったのでしょう。織斑万春の公式戦負けなしの戦績に傷がつかなくて済むのですから。たとえ新型機の模擬戦といえど、負けたとなればマスコミも書き立てるでしょうからね」
ポロポロと言葉が出てきているようだけど馬鹿なんじゃないだろうかな。新型のラファール・リヴァイヴとかいうのと五位の女に肩入れしているけど。
くひひ、負けた時が見ものじゃないの。

戦いなんてくだらない……私のお菓子を味わって

誰の人生にも必ず訪れる転機がある。岐路とも言い換えてもよい。

選択を求められる場面でどのような行動を取るかは人それぞれであって、誰かに決められることじゃないのだから慎重に選ばなければならない。

では立ち塞がる障害も人生の転機の一つなのかもしれない。

スポーツなんかではよくある話でスランプだったりする。それを打破して更なる高みへと向かうか停滞して諦めるか。

どちらを選ぶかは根性との相談。いつ打破できるかも分からないことに挑み続けるのは勇気がいるかもね。でももしかしたらの可能性を捨てて違う道に進むのもまた勇気が必要だ。

どちらを選んでも悔いが残るかもしれないけど、どちらも選べずに悶々とするよりかはいい。

うん。人生なんてきっとそんな大きな選択があったりするものだ。

五位の人との模擬戦は私の勝ちで幕を下ろした。

当たり前だ。私はこれでも世界最強なんだ。ブリュンヒルデ様なんだぞ、舐めんじゃ

ねえよ。
実際はそんな理由で勝てたわけじゃないけど、勝つこと自体は自然の流れだ。
あっちこっちの実力差がそうさせた。運と万が一とか曖昧な現象が口を挟む余地なんてない。
たとえ使用したＩＳが専用機に劣るだけでなく、相手のＩＳにも劣るものだとしてもだ。
だけど、ちょっと驚いたのは対戦相手のレアヴェール・エムロードが模擬戦中に苦難を乗り越えてセカンド・シフトしたことだろうか。もはや新型機の性能をチェックする模擬戦は無茶苦茶だ。
デュノア社の職員が頭を抱えていたけど、私は気にせずに戦い勝利した。
座右の銘は「勝ち負けのある戦いならば絶対に勝つ」だ。
試合が終わった後はデザートタイムということで、作ってきたケーキをヒカルノと一緒に食べる。
「くっ、セカンドシフトしたのは嬉しいけど負けた」
涙目になりながら同じテーブルでケーキを食べるレアヴェールはケーキを美味しい美味しいと呟きながらも負けたことに意気消沈していた。
持ってきたケーキは二切れだけなんだけど、甘くて美味しいものは共有するべきなの

だから私の分を半分ここにしてあげたわけなんだけど、感想をもらえたので食べる分が少なくなってしまったことは大して気にならない。

「ま、スペック的にはラファールの方が上なんだけどにゃあ。残念なことに乗り手の差は断崖絶壁」

ヒカルノの攻撃。

レアヴェールは悔し涙を流しながらケーキを美味しそうに食べた。

「ぐぐぐ。認めざるを得ないわけってこと。私が負けたの認めなきゃいけないってことなの。私は最強なんじゃないの」

「知らない知らない。最強なんて自分で言っちゃう奴に最強なんていないのさ」

「んんぅ。しかーし、私はほんの短い時間でセカンドシフトしたの。これってつまり才能ありってことじゃない。今までいたかしら。こんな短い時間でセカンドシフトできた才女が」

セルフ持ち直しレアヴェール。さっきまでの涙はどこへ引っ込んだのやら。自信に満ち溢れたしたり顔を見せつける。誰にか分からないけど。

でも確かに言うことはもっともだ。

あんな短い時間でセカンドシフトした人は聞いたことないよ。

「あらーん。声が小さすぎて聞こえないわ。織斑さん、もっとおーっきな声で私の偉大

さを認めてくださらないかしら」
あれ。すごくウザい。おかしい。ケーキにアッパー系のへんな奴入れた覚えないんだけど。
残った一口を堪能したレアヴェールは腕輪状の待機状態となったラファール・リヴァイブをうっとりと眺める。
ＩＳが経験を積み装着者と心を通わせることで起きるセカンド・シフトはたとえ国家代表であっても到達する人間は少ない。さらにセカンドシフト後に使えるようになると言われているワンオフアビリティーの発現までいく人間はもっと少ない。
前回の大会でもセカンドシフトまで到達していた代表は私を含めて五人もいなかった気がするし、ワンオフの発現に至っては私とアリーシャしかいなかった。
それほど難しい領域の一端に触れたレアヴェールが自画自賛に走ってしまうのは仕方がない。ウザいけどね。ウザいのはいけないな。
「まだまだ。セカンドシフトに至っただけでワンオフは得られていないけど、私の才能ならばすぐに習得することができるに決まっているわ。そうなれば最強の座は私のもの。残念残念ざんねーん。短い王座でした」
見下してくるレアヴェールにイラっときたのは内緒にする必要のないので、あからさまにイラついて舌打ちしてみる。

「ふふん。はははははは反抗的じゃないの」
「虚勢もはれてないにゃあ。それにしてもイラついているまはにゃんも可愛いにゃあん」
抱きついてくるヒカルノを受け止めて、イラっとさせられる度に舌打ちしてレアヴェールをビビらせて一日が終わった。
家に帰って家族でご飯食べて、お風呂も入り終わっていざ寝ようとしたときに気が付いた。
私、選手引退したから無職だ。

甘い考えで動いてみた

衝撃の事実。

ドイツでの教導を終えてすぐに選手として引退を宣言したまでは良かったのだが、私は選手として生きてきたものだから軽々しくも無職になってしまっていた。

考えてみれば、千冬と一夏のことを養うことの一番の近道としてＩＳ選手として動いてきたけど、それ以外の生き方があまり分からないかも。

スーパーで働くとか。コンビニで働くとか。

とにもかくにも就職の必要性に駆られていることは確かだ。

千冬も選手を引退して職についたことだ。まさか私だけ無職というのもいただけない。

働かざる者食うべからず。

甘いお菓子も食べちゃダメってこと。そりゃあ不味いさ。

そもそも一夏はまだ自立できない子供だ。あの子が社会人になるまではせめて金銭面だけでも支えていかなければならない。

実は選手時代に稼いだ賞金とかたんまりあるけど、頼り過ぎればいずれ食いつぶすの

は目に見えている。

やはり手に職だ。

難しい話になりそうだと思っていたら、千冬からＩＳ学園で働いてみてはと提案された。よければ紹介しようと。

紹介してくれるのはありがたい話なんだけど、どうして勝ち誇った顔をしているのかはとっても気になっちゃう。

喧嘩売ってんだろうけど、買う暇があればお菓子作りに労力を割きたいと思いますので今回は遠慮しておく。終わったら覚えていろよ。このお菓子は食べさせないからな。

しかし提案事態はありがたいものがあり、私はちょっと遠いけど人工島の上に建てられたＩＳ学園へ就職の意思を表明することにしよう。

スーツを新調して身だしなみを整えてＩＳ学園での面接に向かえば、学園の真のトップだという轡木十蔵との面接だった。

面接といっても堅苦しいことはなく、一緒にお茶しながら世間話する程度であっちは美味しいお茶を、私は持参したお菓子を互いに堪能する空間は日常の一幕。

面接というものは企業によって差が出るらしく、世間が想像するオーソドックスな面接もあれば、つまりこれで何が知りたいのか何を求めているのか分からないような面接もある。

今回のケースはどちらに当てはまるかと質問されたら後者だと答えてしまう。それほど面接らしくない面接だ。

「ＩＳ学園を預かる身として貴女のことはテレビで拝見することはありましたけど、声がちっちゃいですね」

すいません、これが全力の声量です。

「ははは。全力の低さにびっくりしてしまいましたよ。うん、ぎりぎり日常生活に支障のない大きさでしょうか」

日常生活に支障ある声量が気になるけど、そこを突くのは危険だ。だって私のことなのだから。

「ただ、教師として採用するためには支障が出てしまいそうです。なにせ何十人の生徒を指導するわけですからね」

ですよね。そうだと思います。でもこれが限界です。突破できますけど大いに喉を傷めるので無理です。

「それは困りました。千冬君の紹介ということもありますし、貴女ほどの腕利きが学園にいてくれることは防衛上非常に魅力的なのですが」

ＩＳ学園はＩＳを扱う専門学校にして各国の新型ＩＳの実験機関としての側面を持つ為に、襲撃を受ける可能性がある。数に限りのあるＩＳは一つ取っただけでも世界の

バランスが崩れてしまう厄介な代物であり、ＩＳ学園の運営は常に難航が予想できてしまう。

何百人の学生を抱えたまま高い防衛力を持つことが難しいとくれば腕の立つ人間が重要視されるけど、私としてはあまり嬉しくはない。

ＩＳなんて私からしてみれば生活を維持する為の手段でしかない。千冬と一夏を養うそれだけの手段がＩＳだったわけで高い志なんてない。

戦闘マシンじゃねえんだよコノヤロー。

スポーツマンシップの塊でもないんだよチクショー。

お菓子作りが趣味な女でしかないはずなんだけど。

「ははは。お菓子作りが趣味なのはこのお菓子を食べれば分かります。味は有名店のものに比べると劣りますが、手作りならではの味があります。私は好みですよ。」

ありがとうございます。お菓子の評価はウェルカムです。

「しかしならば、貴女は世界最強ブリュンヒルデの称号を持つＩＳ選手ですから、世間の目はそれに集中しています。抑止力ともなりましょうか」

さっきからお菓子に伸ばす手が止まってないんですけ。気に入ってもらえるのは構わないけど。

「どうしましょう。私としては採用しますと言いたいところですけ。教師として雇って

いいものかどうか」
　ちなみに料理は無理。お菓子作り以外は素人以下ですから。
「素人の下にある存在が気になりますが、そうですか駄目ですか。調理スタッフも無理となると用務員……は世間が許してくれそうにありませんしね」
　個人的にはちょっと気になります。
「貴女が気になっても絶対に用務員としての採用はあり得ませんから。私も死にたくはありませんので」
　ならどうするんですか。売店のスタッフとか。
「世間の目が怖いので却下で。相応しい立場に落ち着けないといけません。まさか世界最強が売店のスタッフやってるなんて知れたら、ＩＳ学園は崩壊ものですよ」
　立場が邪魔をして就職活動が難航している。
　まったくＩＳに関係のない職を選択するべきだ。でも顔知られているからどこ行っても注目を浴びる。
「うん。ま……なにか考えておきますので採用ということで」
　十蔵さんがその場しのぎで面接を終わらせた。それでいいのかＩＳ学園トップ。
　だけど、一応無事に就職したと考えればそれでいいやＩＳ学園トップ。
　どんな仕事を任せられるか気になるけどそれでもいいやＩＳ学園トップ。

さて、あとは任せてお菓子作りでもしよう。

「あ、次回来るときはまた何か作ってきてください。あと、面接の場に手作りお菓子持ってくる人なんていませんから」

はい、以後気をつけます。

彼?との意思相通はできるのか

ふと目覚める。

広がる光景は見慣れた部屋ではなかった。

目の前に見えるのはこれでもかと高いビル群。そのどれもが空を突かんとばかりに伸び上がって威圧的な雰囲気を作り出している。息苦しいこと。

地面はコンクリートで舗装されていて無機質な硬さを足裏から伝えてくれる。所々に緑が見えるんだけど、自然の緑ではなくて人工芝。ある意味で手入れされている。

ビル群の合間に見える空は晴天。だけど、ちょっとよく見れば空のあちらこちらにひび割れが見つけられる。一番大きなひび割れのところには空の向こう側に無機質な鉄の壁が控えている。

さて質問。一体全体この空間はなんでしょうか。

答えは目の前で行儀よくお座りしている犬が教えてくれる。吠えないでじっとしている犬はゴールデンレトリーバーで大きな体をしている。

でもその犬はあちこちに機械のパーツが埋め込まれていて、とても世間の人々が知っているような犬じゃない。ひどく不自然な存在になっている。

犬はゆっくりと近づいてくる。動きは犬としてはぎこちない。機械の犬だ。機械に犬の動きを再現させたかのようなかくかく動き。

コンクリートに座って到着を待てば、犬は私の太腿に顎を乗っけて撫でろと目で訴えてくる。きっと訴えてきていると思う。うん、犬の気持ちなんて分かるわけがない。だって人間だもの。

でも撫でます。

犬を撫でながら周辺に目を向ければ、私に対して訴えかけてきているような気がしてならない風景がずっと続いている。いつ見ても変わらない。

人の手によって作り出されたビル。

人の手によって作り出されたコンクリート。

人の手によって作り出された芝。

人の手によって作り出された空。

そんな人工物だらけを内包した鉄の空間。

この空間は箱庭だ。自然に生み出されたものなんて一つもない。全てが人の手が入ってしまっている。

この犬だってそうだ。自然の犬に機械パーツがついているなんて聞いたことない。

そして私自身もまた人の手によって作り出された存在だ。

おまえは相変わらずこんな場所にいるよね。
犬の頭を撫で続ける。
この犬は私の専用機のコア人格らしい。
らしいというのも意思疎通ができないから。
だって犬だし。犬が人の言葉を介したらビックリするでしょ。そういうことだよ。
聞けばＩＳとのシンクロ率が高いとコア人格と接触することができるようになるらしい。
千冬も暮桜のコア人格と出会ったことがあってその人格は女性だったみたい。アリーシャもコア人格と会話したことがあると言っていたけど、会話したということは少なくとも犬じゃない。
なんで私のコア人格は犬なんだろ。ＩＳは装着者と分かりあうことによってセカンドシフトしたりワンオフアビリティーを発現したりするというけど、私は犬と分かりあう必要性を求められてしまっている。
せめて犬耳の可愛らしい女の子なら意思疎通できたかも。ちなみに私にそんな性癖はないと言っておく。
コア人格とのふれあいの時間は暫く続く。時計ないからどれくらい経過しているのか皆目見当もつかないけど、決して嫌いではなかったりする。

おまえは何を考えているんだい。
問いかけても犬は撫でられることに夢中で身動ぎしない。ただ、ふんと鼻息が太腿をくすぐってくる。
うーん。犬って甘いものすきなのかな。
分からないけど、もしも甘いものが好きであるのならなんとかしてお菓子を持ち込みたい。
お菓子を量子変換しておけばこの空間で取り出せたりするんじゃないかな。
考えてみてもお菓子を上手く持ち込む方法が思いつかないままに、私の意識は現実世界へと覚醒していくのだった。

目覚めるとＩＳ学園の整備室にいた。
周囲では量産練習機として配備されているラファールリヴァイブと打鉄が並んで置かれていて、その周りをＩＳ学園の生徒たちがツナギ姿で取り囲んで必死に勉強している。
彼女たちはＩＳの基本構造の説明をノートにメモしながら整備士たちの動きに注目している。
ＩＳ学園というとＩＳ選手の養成校というイメージが付きやすく、またＩＳ選手を目

指してやってくる少女が多いんだけど、実際に入ってみればＩＳの構造や整備方法を学ぶことも多い。

やはり、使うだけでなく手入れの仕方も知っておかなければいざという時に呆然としてしまうだけだから学ぶのは大事。

それにＩＳ関連企業に就職するのならＩＳの知識は武器になる。操縦は知っていても整備面はからっきしなんて言おうものならどの企業も相手してくれない。ＩＳの数に限りがあるんだから選手になれる確率も低いしね。

私だってＩＳの整備面の知識と技術は持っている。そりゃあメンテできないと困るし。常に整備してくれる誰かがいてくれるわけでもないのだから。

特に専用機持ちは持たされている以上ある程度自分で見れなきゃ不味いわけだ。

といっても重要なところはヒカルノにお願いしているけど。

そんな私が今やＩＳ学園の整備科の先生として所属しているのだから人生は不思議不思議の連続だ。

声量的に難しい部分はあれど、デカい教室で大声張り上げる機会が少ないために切り抜けられている。必要とあらば拡声器使っているし。

今はたまたま呆けていたんだけど、ほんの少し前までは何人かの生徒を前にしてＩＳのパーツの説明をしたばかり。

腕の装甲をばらしてコレはなんだアレはなんだと説明して、装甲の脱着のさせ方を教えたり。まぁ、元気にやっているわけ。

千冬が選手として経験と、ドイツでの教官生活を元手に教鞭を振るっているように、私もＩＳの整備の知識と経験、あとはヒカルノから教えてもらったことを元手にスパナとか振るっている。

一応、世界最強の存在として認識されている私が整備関係を教えていることに生徒たちはビックリしていたのだが、そこまでビックリすることだろうか。ＩＳに関わっている以上はあり得る可能性だと思うんだけど。

たまにね、失敗するとモンキーレンチでぶっ叩かれるなんて噂を耳にするけど、それは千冬が原因の風評被害に違いない。体罰は駄目絶対。

普通に考えればモンキーレンチでぶっ叩いたら怪我する。あり得ないじゃん。私は別に暴力大好きじゃないのだけど。

数人の生徒が怯えた目でこちらを見てくるけど別に叩かないから。指導している整備士たちは苦笑しているけど誤解を一切解いてくれない。

千冬が生徒たちを出席簿で叩いているせいで、私も同列扱いなことには厳重に抗議させていただきたい。

はぁ、授業中だから甘いものも食べられない。

求められるから嬉しいのだ

整備科の教師として働いてから暫く経つ。

仕事をして初めてのお給料に胸をわくわくさせてしまったことは記憶として古くはない。初任給の響きにあてられた身としては、この初めてのお給料で何をするべきか悩んでしまった。

美味しいスイーツでも食べに行こうか、はたまたちょっとした旅行でもしようか、いやいや貯金して通帳の数字が増えていくのを期待しようか。

お金は現役時代にさんざんに稼いできたけど、しっかり仕事をして得たお給料は別格なのだ。特別な存在ともいえる。稼いだ実感があるといえばいいかもしれない。

頭が痛むまでお給料の使い道を悩んでみて、結論としては一夏へプレゼントすることに落ち着いた。

一夏は文句も言わずに家事を一手に引き受けてくれているし、私と千冬がドイツで教官やっているときは寂しい想いもさせてしまった。迷惑をかけてしまった今までを思うと、初任給は一夏の為に振るってみるのが一番の使い道と思った次第だ。

とは言ってもプレゼントをどうするかが問題だ。

一夏の奴はあまり物欲がないし、妙に浮世離れしていて流行に疎いところもあるし、勘はいいけど察しは悪いし人の心の機微に鈍い。

そんな弟に何をプレゼントするべきか悩む。悩みまくりだ。

千冬に聞いてみれば参考になるかも。初任給は何に使ったのか聞いてみたんだけど、まさかの酒に消えたとのご回答。マジで言ってんだよね。

ひとまず一夏へのプレゼントは模索中ということで一旦保留しておこう。そして自然と消え行くのを待つ。

ＩＳ整備室では今日も授業が行われている。

ＩＳの基本的な整備方法を徹底的に叩き込むのが私たち整備科教師の仕事であり、特に一年生が整備科へと進路を向かえても苦労しないように鍛え上げなければならない大変さがある。

大抵の生徒たちはＩＳ選手としての進路にばかり目が向いているので、入学したての一年生の中で整備関連の授業に強い興味を抱く者は少ないのが現実だったりする。

そりゃあ、使い方さえ知っていれば構造を知らなくてもいいし、どうせプロの整備士に任せれば万事解決してしまうのだから自分たちは使い方を極めればいいと思っちゃうかもしれない。

事実その通りだし。

でも恵まれた環境ばかりとはならないしＩＳ選手になれるのは一握り。広く学んで損はないでしょ。

一年生であってもある程度に学園生活に浸かっていけばＩＳの実技教習以外でもやる気を見せてくれるようになり、整備科としても授業にやりがいを感じるようになる。

私なんかは特に目の前で不器用ながらもＩＳのパーツを解体する少女にやりがいを感じていたりする。

彼女は決して整備士として類い稀なる才能持ってはいないけど授業態度は真面目だ。顔を油で汚すことも辞さずに必死に食いついてくる。

だから私もついつい構ってしまう。失敗してしまったらヒントを与えて考えさせる。もしもうまくできた場合は次にどうすればうまくなるかをアドバイスもする。

おかげで一年生の中で一番交流のある生徒になった。具体的に言うと一緒にお茶してまったりする関係。

美味しい紅茶だよ。

紅茶と一緒に食べるクッキーはより美味しく感じられる。相乗効果さまさま。

「ありがとうございます。先生の焼いてくださったクッキーもとても美味しいですよ」

ありがとう。やっぱり甘いものは至福だね。甘いものが嫌いな人は人生の半分は損しているんじゃないかな。

「その通りかもしれません。甘いものはいくら食べても飽きませんから。食べ過ぎてしまうとあとで泣きを見てしまうんですけど」

女の子にとって甘いものは最高の楽しみなんだけど、同時に最悪の事態を引き起こす種となりかねないのだ。具体的に言うと体重計が怖くなる事態。

しかし、女の子ではない私には怖くなかったりする。いくら食べても太らないのだから気にならない。これ昔千冬に言ったらぶん殴られそうになったなぁ。

さすがに言えない。いくら教え子相手でも太らない体質だってことは言えそうにない。

そうだね。セーブするか、あとで頑張って運動するしかないよね。

はい、嘘。嘘だけど布仏虚にはバレてない。しきりに頷いたりしながらもクッキーに手が伸び続けている。後で泣きを見るペースだね。

「はぁ、この楽しい日々も来年には減ってしまうのでしょう」

うん、なんで鬱ってんの。

「いえ。来年にはお嬢様が入学されるので一波乱ありそうだと思いまして」

お嬢様？

「先生にも言っていませんでした。私こう見えてもとある家でメイドとして仕えています」

メイド。つまりは借金を肩に売られてしまったってこと。
「先生のメイドに対する価値観の一端を見た気がしました。違いますよ。私の家は代々更識家に仕えてきただけですから」
ごめん。ご主人様に逆らえず18禁的な酷い目にあうイメージしかないかも。後はメイド喫茶とか。
「か、偏り過ぎです!!」
顔を真っ赤にして……もしかしてイメージしちゃったのかな。意外にむっつりしているねぇ。ませてるねぇ。言うほどませてないか。
トマトみたいに真っ赤になった顔をした虚は頭の中のいやらしいイメージを消すかのように残りのクッキーを全部口に突っ込んでしまった。
……え、全部食べちゃった。
まだ三枚しか食べてないのに。
喉を詰まらせて苦しんでいる虚に紅茶を渡す。この部分だけ見ると有能なメイドじゃなさそう。愛でる分には優秀そうだけど。
「ま……万春先生。次回のお茶会までにメイドについて正しく勉強してください」
ハイハイハイハイ。
「ハイは一回で」

ハイ。暇があれば勉強してみるよ。と言っても私にはお菓子作りの勉強が優先なんだけど。

そう言うと虚は急に眼をあちこちにさ迷わせはじめた。コロコロと表情豊かで見ていて飽きない。

「お菓子作りに支障がでない程度で構いませんので」

なかなか嬉しいこと言ってくれるね。

だから甘ちゃんなんだよ

甘ちゃん先生。

生徒たちの間に広まっている一つの渾名。

渾名は良い意味で使われる時と悪い意味で使われる場合がある。

良い意味で言えば愛称的な感じ。親しみがあって生徒から慕われている。

悪い意味で言えば蔑称的な感じ。完全に舐められている。

甘ちゃん先生は私に付けられた渾名だ。意味としては後者の方で使われている場合が多い。けっこうへこむ。

虚から聞いたけど、生徒たちは世界最強の称号を持つ私がＩＳの実技授業を担当をせずに、ＩＳ整備科に逃げるなど実力がないと言っているようなものだと思っているとのこと。本津は千冬にも勝てないし、第二回モンドグロッソでの決勝戦棄権も勝てないから一夏の誘拐をでっち上げて棄権が認められる状況を作りあげたなんて憶測語っているけど、よくもそこまで思いつく。想像力豊か過ぎる。

実際の状況を知らなければ僅かな情報でモノを語るのが人間だし、肯定的にも否定的にも捉えてしまうものだ。

決勝戦は確かに棄権したし、アリーシャも同じく棄権した為に第二回モンドグロッソは事実上優勝者のいない幕引きだったが、あの後非公式にアリーシャと戦っていたりするのだ。もちろん私の勝ちで幕を閉じたが。

というか私は生まれの関係で負けることなどあってはならない。負けたら不味い。出自的問題になってしまう。そもそも勝ち負けを決めることのできることで負けたくないし。

甘ちゃん先生と言われるけど授業では真面目に指導している。

ＩＳに限らず整備を怠れば悲惨な事故につながりかねない。しっかりと整備することで安心して使うことができるのだから。

授業では整備の大切さを口酸っぱく言って聞かせているが、ＩＳ選手を目指そうとして向上心猛々しい生徒は整備なんて脇道程度にしか考えていないから授業に身が入っていない。おういう生徒は痛い目見ないと大切さが分からないんだろうけど、痛い目見てからでは遅いので、私もできる限り頑張っている。

もしかしたら授業そのものに興味がないのではなく、私の授業の行い方に問題があるのかもしれない。

整備科の先輩教師に評価を聞いてみたが、誰もが開口一番に「声が小さい」と言ってくる。そいつは改善できそうにありません。

私の教師生活は生徒から舐められつつも継続中。

でも良い意味で甘ちゃん先生と言われる時もある。甘い物に目がなくてお菓子作りが趣味な先生として慕ってくれる子もいるのだ。

お菓子を提供しているのもある。もちろん授業中じゃなくてフリーな時間の時にだ。さすがに授業中にお菓子は渡せない。

放課後は整備科で虚をはじめとして何人かの生徒にＩＳ整備の追加指導をしている。ちゃんと許可を受けて行っているし、生徒の方が指導を求めてやってきたので私が拒む理由はない。お菓子を振る舞えて感想も聞ける。

特に虚とは師弟の間柄に近くなったと思う。思うだけ。

今では虚も整備科生徒として高い実力を有する存在になった。おそらく二年生にして最も優秀な生徒だと思う。整備科教師の間でも覚えが良い。

「すみません万春先生」

頭を下げなくてもいいよ虚。慣れてるから。

放課後になり虚がやってきたところまではいつも通りだけど、虚と一緒にやってきた一年生が問題だ。新しくやってきた一年生の間にも既に甘ちゃん先生の渾名が浸透してしまっている為に、各国の自信に溢れる代表候補生が喧嘩を吹っ掛けてくることがある。それはいいけど、私は生徒の喧嘩を買ってあげることはない。

面倒だし、争うの面倒だし。
教師と生徒の戦いで問題になったら。
面倒だし。
要は面倒だし。
「万春先生。決闘を申し込みます」
ビシッと指さされた。人に指ささないで。
片手を腰に当てて指さしてくるのは更識楯無。日本人なんだけどロシアの代表候補生を務めている変わった少女だ。
そんな少女に喧嘩を売られてしまっている。
当然、お断りです。
「声小っちゃ!?」
「お嬢様。事前にお伝えしましたが」
「想像してたよりも小っちゃくてびっくりしたのよ。これで授業とかできるう?」
はい、絶賛喧嘩を売られている最中。どうあっても挑発して私に拳を振り上げさせたいらしい。その手には乗らない。
生徒の努力で成り立っているよ。
「そこは先生が努力すべてところではないですか」

無理。喉が裂けちゃう。
「先生。無理なさらないでください。お嬢様も無理を言わないでください」
「なぜに虚ちゃんがこっち側にいてくれないのか気になっちゃうところだけど、そんなに無理言っているつもりはなかったんだけど」
「そもそも教師が生徒と戦うわけがないでしょう」
「えー!?　ＩＳ学園って血気盛んなイメージがあるじゃない。織斑先生なんて若輩者を千切っては投げ千切っては投げの戦闘狂って聞いていたんだけど」
千冬はそんな戦闘狂じゃないよ。ただＩＳの授業が真剣過ぎて手を出してしまうだけで。
「ブリュンヒルデがどれくらい強いか知りたい知りたい知りたい～」
駄々っ子のように腕をぶんぶん振り回す楯無。様になっているのは彼女の幼児性の表れなのか、それとも演技派のなせる技なのか。虚のため息だけでは判断つかない。
私は生徒を相手にして戦うことはない。それは変わらずだ。
だから代わりと言ってはなんだけど昨日の内に作っておいたチョコクッキーを取り出す。
これで機嫌直してちょうだい。
「甘いもので誤魔化そうなんてそうはいかないですよ」

「と言いつつ手を出しているじゃないですか!?」
「だって万春先生のお菓子は美味しいってひっそり評判なんだもの。食べちゃってもいいじゃない、甘い物だもの」
「……今日も美味しいですね」
「虚ちゃんだって食べてるじゃないの」
「私は別に関係ありませんから」
虚は気にせずにクッキーに手を伸ばす。一口食べると幸せそうに身悶える姿は見ていて嬉しくなる。やっぱり甘い物は正義なのだと確信できる光景だ。
楯無も一口食べて幸せに片足ツッコんだ顔をしてくれるから彼女にも好評なのは分かった。このまま戦いなんて忘れてお菓子タイムに突入しよう。
「くっ。今日は引き下がりますけど、次は試合してもらいますよ」
絶対にお断り。

三人寄らばなんとやら

更識楯無はよほどの自信家なのかそれとも暇なのか。

試合を申し込まれたあの日からというもの、放課後の度に楯無が勝負を仕掛けてくる。その執念を他のことに使うべきだと教師としてアドバイスしてみたくなる。

試合なんてお菓子作りの時間に変換した方がいいに決まっている。甘くて美味しいお菓子を作って食べて幸せになれればベスト。この前の休みには一夏にお菓子を作ってあげたけど、あの子はいつも満面の笑みでお菓子を食べてくれるから作ったかいがある。

ＩＳ学園なんて荒っぽいところだけど進んで荒っぽくする必要はない。その荒っぽさが社会生活のどこで役に立つかも分からないじゃない。

ため息をつくと幸せが逃げていくのなら、幸せ詰め込んだお菓子でも食べればいい。

今日も今日とて放課後の整備室で勉強熱心な生徒たちに指導を行ってみれば、彼女たちは真剣な表情で手を動かしていく。

放課後はＩＳを借りて訓練する生徒たちがいるので整備する必要がでてくる。整備科の生徒たちは使用されたＩＳに群がって整備の技を覚えていってくれるので、私とし

てはちょっと胸を張れる指導力の高さだと思いたくなる。
整備が終われば、ご褒美タイムだ。昨日の内に作っておいた新作のお菓子が待っている。本見て作っただけなんだけど、生徒たちの口に入ることを想像して少しでも美味しくなれと念じながら作ったから違いが出ているはずだ。
「うーん。やっぱりいつ見ても虚ちゃんは器用にこなすわね」
訓練が終わってやることのない楯無は整備の様子を見ている。
見ているとは言うけど彼女はロシアの代表候補生として専用機を渡されているので、目の前で生徒たちにちょこまか弄られているのは訓練機のラファール・リヴァイヴだったりする。さすがに国の技術が敷き詰められた専用機は未熟な生徒には任せられない。そういうのはロシアから出向している機付長の役目だ。
専用機を貸与された楯無は確かな実力者なようで、先日生徒会長を務めていた三年生を打ち負かして一年生ながら生徒会長に就任した。
ＩＳ学園の生徒会長は実力主義で学園でもっとも強い生徒に与えられる役職だ。ただし、強いは変動することが往々にしてあるために、三年生が入ったばかりの一年生に負けることもある。
楯無が生徒会長に就任したところでひと悶着あったが、彼女にはカリスマが備わっていて騒動は瞬く間に鎮火して今や立派な生徒会長様だ。

多少、お遊びが過ぎるところもあるけど、ＩＳ学園というエリート校の息苦しさに喘ぐ生徒たちのガス抜きになるから教師たちも黙認している節はある。

私も黙認派。こっちに害がなければ問題はない。

ただ、いちいちＩＳバトルを申し込んでくるのはやめてほしい。鬱陶しいことこの上ないから。

そんでもって楯無と同様にちょっかいをかけてくる生徒がいる。

名はダリル、性はケイシーという豪の者よ。

簡単に言うとダリル・ケイシーだ。

虚と同じく二年生でアメリカの代表候補生を務める実力者。この前楯無に打ち負かされたけど、そこで腐ることなく訓練に明け暮れている立派な生徒だ。

立派過ぎて私に勝負挑んでくるのは問題だけど。何がどうして私と戦いたいと思うのは理解に苦しむ。高々世界大会で優勝しただけの身分でしかないのに。それも勝って当たり前の戦いに当たり前のように勝っただけ。

なんら誇るところもない勝利の上での世界最強に意味なんてないんだけど、周りはそう見てくれないらしい。千冬にも言ったけど呆れられるだけだったし。

「よう先生。早速だけどバトろうぜ」

ダリルが背後からのしかかってくる。全然重くない。重くないんだけど、彼女の恋人

であるフォルテ・サファイアからの圧は重い。
お断り。邪魔だから退いて。
「えー!?　連日連夜頼み込んでるのによぉ。いい加減応じるのが礼儀じゃねえのか」
「そうですよ。私たちの想いに応えるのも先生としての務めじゃないかしら」
「そうっス。そんでもってダリル先輩は先生から離れるっス」
そんな務めないよ。さらに言えば整備科の人間だから戦いはちょっとね。
「そもそもブリュンヒルデが整備科の教師ってのがおかしいだろ。どんな人選だよ」
「そうね。経歴を考えるに普通ならＩＳの戦闘技術を教えるのが適当だと思うのだけど」
「うーん。こっちの方がお給料良かったりするっスかね」
「もしくはこっちの方が仕事が楽なんじゃね。面倒なのは勘弁だしな」
「それはないと思うわよ。どっちにも授業中に事故が起こり得るもの。責任を考えればどっちもどっちよ」
「分かった。分かったっスよ」
「おぉ!?　マジかフォルテ」
「フォルテちゃん。もしかして正解だったりして」
「織斑先生と比べられるのが嫌からっスよ」

うん。全然違う。
単純に教師やるには声量が足りなさすぎるだけ。声張り上げるなんて無理。喉が裂けちゃう。
「なるほど。戦いを拒否するのも同じ理由かしら」
「ははん。織斑先生の方が強かったとか言われたら立つ瀬ねえもんな」
「ふっふっふ。ウチの推論が冴えるっス。ピッタリ言い当てて見せたっスよ」
言いたい方だ。多分に私を戦いに引っ張り込もうと挑発しているところがあるけど、その程度で感情荒立てることはない。だてに世間から塩試合、エンターテイメント性が足りない、凄いけどすごく見えない試合と言われてきたわけじゃあない。あっちの方が傷つく。
はいはい。そういうことでいいから静かにね。とくに更識、布仏が可哀そう子を見る目をしているから気を付けるように。
「え!?　なんでそんな目をしているの。というかさっきからこっち見てるし。手元見なさい。ちゃんと手元見て作業して!!」
「はぁ。今日も駄目かよ。いつかゼッテー試合してもらうぜ先生」
「ウチはどうでもいいっス。そんなことよりも万春先生のお菓子が食べたいっスね」
はいはい。お菓子はみんなの作業が終わってからね。

それそれ　サーチあんどデストロイ

お昼は学食で食べるのが日常なんだけどたまに外で食べることもある。お菓子以外の料理は全く作れないけど、学食のおばさんに頼めばお弁当を作ってくれるので、好意に甘えて作ってもらったお弁当を手に今日は外で食べるのだ。

『スナイパー1より各員。目標を確認、これより作戦を開始する』
『スナイパー2了解だぜ』
『スナイパー3オッケーっス』
『ええと、お嬢様。なんで私が巻き込まれているのでしょうか？』
『スナイパー4。今は作戦行動中よ。コードネームの使用を厳となすように』
『……スナイパー1。お昼休みなんですから言葉通りに休みませんか？』
『お断りよ。目標が警戒を解いている今こそがチャンスなのよ』

『そうだぜ。こいつは先生の実力を測るために必要なアクションさ』
『大丈夫っスよ。ゴム弾っスから』
『どう考えても不必要なアクションでしょう。教師を狙撃するなんて知れたらどんな罰が待っているか分かりませんよ。今ならまだ引き返せます。おじょ……スナイパー1も2も3も考え直しませんか』
『臆したのかしらスナイパー4』
『おいおい。同じ釜の飯を食った仲だろ』
『そうっスよ。先輩らしく堂々とするっスよ』
『臆してます。それに同じ釜のご飯を食べたからこそ止めに入っているんですよ。あと教師の狙撃を堂々と行ってどうするんですか』
『話はそこまで。目標が移動開始。狙いやすい場所に移ったわ。狙ってくださいと言わんばかりね』
『こっちに対する挑戦か。いいね、一発で仕留めてやるよ。ヘッドショットだ』
『ゲームなら気づかれてないヘッドショットなら相手のシールド貫通するっス』
『ゲームのやり過ぎです』
『じゃあ。作戦は伝えた通り。私スナイパー1が狙撃を開始。初弾が外れた場合2と3による同時攻撃。スナイパー4は2と3の攻撃を回避された場合、狙撃ポイントの変更

を援護を』
『お嬢様。その情熱を生徒会運営に生かせませんか』
『無理。それに今の私は世界を震撼させるスナイパーーよ』
『真面目な顔して変なこと言わないでください』
『ねえ。照準私に向いてない？』
『あひゃひゃ。間抜け面じゃあねえか』
『あれ、これ二人から狙われてたりする？』
『気のせいじゃないっスか。あ、こっち向かなくて良いっスよ』
『絶対狙われてるじゃない!?』
『冗談冗談。フレンドリーファイアはしないぜ』
『そうじゃなきゃ困るわよ』
『割と冗談抜きで焦ってたっスね』
『撃たれないと分かっていても狙いつけられるのは落ち着かなくなるわ。スナイパー３も体験してみる？』
『勘弁っス』
『まぁ、一生体験しなくていいことだからな。よし、お前ら。これより対象に攻撃を仕掛けるぜ。ぬかるんじゃねえぞ。ダリル・ケイシー小隊出撃だ』

『出撃も何もないっスけど』
『既に出撃済みですよ』
『かー。分かってねえな。こういうのは雰囲気が大事だろ。それに一度言ってみたかったんだよ』
『ああ、そうですか』
『そうらしいっス』
『急に冷めるか。これだから水とか氷タイプは』
『先輩みたいな炎タイプは鬱陶しいくらい熱いっスよ』
『うん。ダリル先輩の専売特許ですよね』
『お前ら。先輩に対していい口の利き方してるじゃあねぇか』
『それよりも対象がお弁当を食べ始めたっス』
『敵分析完了。モニターに表示するわ』
『モニターがないぞ』
『ノリです』
『勢い勝負にもほどがあるっスよ。楯無』
『まさに破竹の勢いね』
『違くね？』

『違うっス』
『……あ』
『え？』
『おぉ？』
『対象のお弁当を見て』
『……美味しそうだな』
『美味しそうっス』
『お腹空いてきたから早々に終わらせましょうか』
『りょーかい』
『恨みはないっスけど』
『ええ、恨みはないけど仕方がないわ』
『他に被害を出すと不味いからな。先生だけを射抜くぞ』
『ところで』
『おう』
『虚ちゃんからの通信がないわね』
『アイツ真面目だからな。こんな馬鹿げたことやってらんねーんだぜ』
『布仏先輩。見るからに真面目そうっスからね』

『うん。虚ちゃんなら仕方ないわね。でもやめるにしても一言あってもいいはずなんだけど』
『言い辛いんじゃねえか。ま、気にすんなって。今は目の前のことに集中だ』
『そうですね。改めて作戦開始といきましょう』
『はいっス』
『スナイパー1・これより攻撃を開始するわ』
『……は？』
『……え？』
『……避けたぁ!?』
『気づかれていないはずっスよ。それもこんな距離から撃ってんのに』
『マジかよ。意識外からの狙撃だぞ。偶然にしたって出来過ぎだ。第二射行くぜ!!』
『……また避けた!?　フォルテ、続けて攻撃を』
『行くっス!!』
『また……回避された』
『やべぇ!?　こっち見た』
『逃げてダリル先輩!!　スナイパーが位置を知られたらお仕舞いです!!』
『あんなブリュンヒルデに勝てっこないっスよ!?』

『安心しろ。こっちには来ないさ』
『分からないわよ。教師権限でＩＳ使われたら一瞬よ』
『その前に逃げるっス』
『逃げる。馬鹿言え。ゼッテー顔見られたぞ。いかに甘ちゃん先生と言えど狙撃した生徒を見逃すか』
『待って。この距離よ、顔なんて見れるはずないに決まってる』
『以外に見えてるかもしれんぞ』
『……え？』
『ねえ。さっきから違う声が聞こえてくるのだけど』
『それもやけに聞き覚えのある声だな』
『ひぃやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?』
『フォルテ？』
『フォルテちゃん？』
『……よおスナイパー共。生徒が教師を狙撃なんて感心しないな』
『もしかして……織斑先生？』
『マジか!?』
『ご名答。景品は教育指導で構わんな』

『バレたかー』
『軽い!?　軽すぎますますよダリル先輩』
『おう。もう逃げれないから。無理だから。これでも絶望してっから』
『覚悟はいいみたいだな。では迎えにいくからソコを動くな』
『ちなみに動いたら』
『……さあな』
『大丈夫ですよ織斑先生。オレなんか恐怖で足が地面に縫い付けられてるから』
『お、織斑先生。虚ちゃんは』
『安心しろ。アイツは素直に投降したよ。この無線機は布仏から借りたさ。一応言っておくが、キサマらの配置は簡単に見つけられたよ』
『……分かりました。お、お待ちしておりますぅ』
『そうか。では万春先生を狙撃したことをしっかり悔いるんだな……マッテロヨ』

きょひなんですけど

「ほう。そろって休みの日か」

勤務表を眺めている千冬。昼休みも残り少ない時間となる中でよほど暇なのか私のところまでやってきたかと思えば、休みの日に何しているか聞いてきた。

休みの日にすることはスイーツ巡りかお菓子作りの二択。千冬だって知っていることなのに聞いてくるのは、話のきっかけに過ぎないのかもしれない。

「久しぶりに二人揃って家に帰るのも悪くないだろう」

ブラコンな千冬は一夏が喜ぶ姿でも想像したのかわずかに口元が緩んでいる。緩みまくってデレデレしすぎないところは千冬の公私をしっかり分ける真面目さか、見られることを恥ずかしがってかは判断つかない。

家に帰る。たまにある休みは家に帰っているけれど、千冬が言うように仕事するようになってから千冬と二人して帰路につくことはなかった。単純に二人の休みのタイミングが合わないだけなんだけど、職場内でひっそりと蔓延している織斑姉妹不仲説。

実際にはそこまで不仲ではない。私としては千冬は妹だし私と違ってちゃんとした人間なのだから愛すべき存在だ。あまり甘いものが好きではないから私の作ったお菓

子をあまり食べてくれないのが残念だけど。
千冬が私をどう思っているかは分からない。嫌われてはいないと思うが、千冬はストレートに愛情を表現してこないからどれくらい好かれているのかは分からない。職場でも最低限の会話しかしてないし。
「どうする？　何か用事があるのなら無理強いはしないが」
いいんじゃない。悪いことじゃないと思うから。
「相変わらず声が小さいぞ」
今更だよ。
「確かにな。一夏には前もって連絡しておく」
よろしくね。
久しぶりに姉妹での当てのない会話。お互いに世事に疎いことがあり会話の広がりは悪いけど、とくに成果を求めた会話じゃないので会話の間の沈黙は気まずくならない。
それよりも周りが私たちを見てひそひそと会話していることが気になる。きっと不仲なのに、とか思っているんじゃないだろうか。別に仲良くてもいいじゃない。
「そういえば、明日は特別授業が行われるのは聞いているか」
特別授業。聞いたことない。

「整備科には関係のない授業だから話が回ってきていないのかもしれないな。なんでも優秀な元国家代表選手を招いて一日だけコーチをしてもらうらしい」
元国家代表選手にコーチ。大丈夫なの。一流選手が必ずしも優れたコーチとは限らないのにさ。
「その通りだ。だから今回の特別授業は実験みたいなものだ。目的は閉鎖的になりやすい学園生徒の意識向上。上手くいけば定期的に行うという話だ」
呼んだ代表の指導力がからっきしだったら意識向上はできないかもしれないよ。
「確かにな。だから実験なんだろう。問題は誰が来るかだ」
明らか呼ばない方がいい人たちもいるからね。
「ああ。アイツら呼んだら終わるな。さすがに学園長も馬鹿ではないだろうから、アイツらを招くような愚は侵さないだろう。とすると誰が来るか」
私、あまり他国の代表は知らない。そこまで仲良くしなかったから。
「私もだ。そもそも代表じゃなかったしな」
ごめんね。私がいなきゃ代表だったさ。
「知っているよ。万春がいるから私は代表になれなかった」
嫉妬の感情のない冗談めかした言い方。千冬は私が何ゆえにＩＳなど纏っていたのか知っているし、同時に私という存在の異常さを知っている。

千冬は人間として高いスペックを持つのなら、私は人外的なスペックを持っている。人間と人外では比べようもないのだから私が人間如きに負けることが断じてあっちゃならない。国家の威信を背負った代表が相手でも変わらない。

「だが……私が代表になれなかったとしても自慢の姉が代表だったんだ。それで十分さ」

言ったが最後、千冬はそそくさと割り当てられたデスクへと逃げていった。気のせいでなければ耳が赤くなっている。千冬渾身の愛情表現と見たり。

思いもよらぬ言葉に私も嬉しくなって千冬好みの甘さ控えめのお菓子を作ってあげようと思った。私好みではないけどたまには誰かの好みに合わせるのもいいかもしれない。

放課後。

普段であれば整備科の中でも非常に熱心な生徒たちの整備を眺めるところなんだけど、今日においては学園長に呼び出しを食らってしまった。別に悪いことをした記憶がないので不当な呼び出しと抗議してもいい。

学園長室はさすが組織の長が常駐している場所だけあって豪華絢爛至れり尽くせりだが、所詮は別次元の世界でしかないので私に関係のある装飾じゃない。

今の私にとっては呼び出させれる理由がなんなのか一点に尽きる。だって放課後を邪魔されると虚たちの整備が見れないんだ。

用件次第ではお菓子作りにも支障が出るので手短にお願いします。

「入室と同時に言うことではないと思うのですが……まぁ良いでしょう。一応誤解なきように言っておきますけど、別に悪いことをしたので呼び出したとかじゃないですよ」

それは良かったです。だとすると何の用件で呼ばれたのでしょうか。

「聞いているかは分かりませんが、明日特別授業を行おうと思っていまして、その為に元国家代表の方々をお招きしているのですが」

学園長の轡木さんが柔和な笑顔を浮かべている。

「是非とも貴女にもその特別授業の講師の一人として参加していただきたいのです」

お断りします。

はっきりと断る。こういうのは曖昧な態度だと流されて結局やらされる目に合うことが分かり切っているのだ。ノーと言える日本人になるべきだ。

「困りましたね。私としてはいい案だと思ったんですけど」

何をどうひっくり返していい案とするのか。整備科教師として充実した日々を送っているのに一日と言えど別枠に講師として働けとは。

「前々から生徒たちの中だけでなく教師の中でさえ貴女を過小評価する者がいます。ブ

リュンヒルデの実力に疑惑ありと。私としては貴女の実力を見せその評価を正当なものに変えるべきだと思っているのですよ」

いえいえ。その程度の評価捨て置けばいいんじゃないでしょうか。私は気にしませんし。

「貴女を招き入れた手前私が気にするのです。それに貴女は二度も国家代表として世界の舞台に立った。それは実力者でなければ不可能なのですよ。それを選手を育てるべき教師が正しくものを見れないとは情けない話ですよ」

轡木さんはやれやれと首を振ってため息をつく。彼からしてみれば教師陣の態度が気に入らないらしい。しかし教師と言ってもそれぞれの考えがあるし、エリート校であるＩＳ学園の教師ともなれば自分こそがと相手を見下してしまう部分もあると思う。それが愉快か不愉快かは置いて。

「どうでしょうか。せっかくなんですからやってみませんか」

え、やりたくないです。

「やりなさいよ。そして私がこんどこそ敗北の味を教えてあげるわ。地べたに這い蹲って涙で濡らしてあげるんだから」

そしてなぜか来客用の質の良さそうなソファーで寛いでいるレアヴェール・エムロードからの援護攻撃。なぜいるのか分からない。そしてなぜ勝てると思い込んでいるの

か分からない。

レアヴェール、まだ日本にいたの。

「そんなわけないでしょ。あの後フランスに戻ったに決まっているわよ。私だってセカンドシフトしたＩＳの報告があったの。今回は学園側から一日講師をやってみないかと打診が来たの。なんでも織斑さんがＩＳ学園で働いているじゃない。それはもうリベンジマッチの時機到来と二つ返事で了承したわ。そんなわけで一日講師の件を引き受けなさい。それが嫌なら私の帰国の為のチケット代と今日までのホテル宿泊料金を払うのよ」

うぐぅ。それは嫌だ。

「えぇ……一応お給料の方は配慮しているんですけどね。そんなに払うの嫌なんですか」

だってレアヴェール金銭感覚おかしそうだもの。絶対にバカ高い金払わなきゃいけないに決まっている。

「失礼ね。おかしくないわ。そうね、全部でコレくらいかしら」

紙に書いた料金は一般庶民が払うには手が震えるほどの額だった。横から覗き込んだ轡木さんでさえ言葉を失って紙に書かれた数字と、コレくらいはした金よと言いたげなレアヴェールを交互に見る始末。

「な、なによ!?　別に大した額じゃないでしょ!!」

私も轡木さんも目を逸らすことしかできなかった。

会議は踊らずだから進まず

ＩＳ学園初の試み。

元国家代表を一日だけ講師として招いて行われる特別授業。今日はまさしくその日なのだ。

特別授業は午後時間全てを使って行われるのだが、肝心の講師役の元国家代表たちが果たして使い物になるかどうか。

とりあえず朝一の段階で判明している講師は千冬とレアヴェールそして私。

断り切れなかった。断りたかったんだけど法外なキャンセル料を請求されるとなると断るに断れなかった。響木さんも払いたくないのか私に何度も講師役を引き受けるよう要請してきたこともあって、泣く泣く引き受けるしかなかった。

特別授業の講師として何をするべきか。千冬も私もまったく分からないままに今日を迎えてしまったけど、なんでも上層部側も手探りみたいでカリキュラムはまさかの講師陣に丸投げ。午前中に講師たちで話し合って決めてくれだと。突貫作業にもほどがある。

会議室で待機。千冬がお茶を用意し私がお菓子を作ってきてレアヴェールがそれら

を堪能する。
「それで何をすべきかが問題だな」
　千冬が腕を組んでため息を吐く。
　午前も１０時を回り未だに残りの元国家代表たちがやってこないので何をするのか授業内容を決めることもできない。教師として授業の中身を決める難しさを知っている私たちは少しずつ焦り始めている。唯一焦っていないのは教師ではないレアヴェール。
「私たちが何をしたところでみんなには勉強になるでしょ。何もきききき、気にしなくていいのではなくて」
　実はもっとも焦っていたレアヴェール。気のせいじゃなければお茶を飲もうとしているけど手が震えている。
　こっちが冷静になる。
「……真面目に考えるべきだぞ。まだ残りのメンバーが来ていないとは言えど、ある程度の形は作っておく必要がある」
　同感。遅れる人は遅れるから悪い。こっちの指針に従ってもらうしかないよ。
「私が織斑姉妹をコテンパンに叩きのめす流れでいくわ」
「夢ほざいてないで真面目に考えろ」

現実を見ようか。
「戦績を覚えてないのか。五位だろ」
この前の新型機の模擬戦で手も足もでなかったっけ。
「それも聞けばセカンドシフトしておいて負けたのだろ。とても実力があるとは言い難いな」
「貴女たち。残虐なコンビネーションで私を傷つけて楽しい!?」
全然楽しくない。
「傷つけておいてソレ!?」
「五月蠅いぞ。エムロード」
「この姉にしてこの妹ありね!!」
ぎゃーぎゃー騒ぎ立てるレアヴェールの頬を伝う涙は見なかったことにしておく。
仕方がないのでお菓子でも与えれば涙を流しながらも美味しいと呟きながら食べてくれるから、お菓子を作った身としては嬉しい限りである。
意気消沈して黙り込んだレアヴェールは放っておき特別授業の内容を考える。
単純に各講師が生徒たちの動きをあれこれレクチャーするのが無難か。だけど、それでは特別授業とは言い難いし、午後いっぱい時間を使えるにしても不足している。何せ今回の特別授業に参加するのは一年生全員と二年三年の希望者。まず一年生全員の時

点で厳しい。実技指導を行うアリーナは十分にあるが、講師陣が生徒たちをきちんと捌き切れるか。普段の授業みたいに一つ二つの課題をやってもらうだけにしても人数が多すぎる。

二年生三年生がどれくらい参加するのかはこっちに情報が回ってきていないので全く判断できないせいで、より一層やるべき内容が決められない。

せめて現在絶賛遅刻中の残りの元国家代表たちが指導者として実績と経験を持つ人間であることを求めるが、レアヴェールに講師として声がかかっている時点で嫌な予感しかしない。そもそも遅刻を決めている時点で嫌な確信しかしない。

困ってしまって千冬に視線を向けるが目を逸らされてしまった。コイツ……同じこと思ってやがる。

精神的ダメージで沈黙するレアヴェールを無視して二人でなんとか授業の組み立てを行い続ける。嫌な予感しかしない為、とにかく負担を少なくかつ特別の名を利用して世間一般的な授業方式の放棄を目指す。

暫く、傷を癒やしたレアヴェールの自分こそが最強発言をＢＧ?にして作業を行っていれば、ようやく会議室の扉を叩く者が現れた。

時刻は既にお昼前。数分もせずにお昼休みに入り、そこから一時間もすれば楽しい特別授業の始めりである。

実は私も千冬もいい案が浮かばずに時間だけを消費していただけでほぼ何もしていない。なぜなら頭の中にあるのは不安と絶望寸前の諦観だからだ。

そして今この時において会議室の扉が開かれる時がきた。ノックから一瞬の間を置いて開かれた扉だが、こちらの返事も待たずに開かれる扉を見るにノックの意味はあったのだろうかと疑問を抱かざるを得ない。

目に映る全てのモノがスローモーションに見える。まるで扉の向こうにいるであろう人物を見たくないと言わんばかりに。実際に見たくないのだけど。見なけりゃ予想は予想のままで終わってくれるのだから見たいと思うはずがない。

でも、どんなにスローモーションになっても時間が止まっているわけじゃないので、ゆっくりと確実に扉が開かれていく。ダッシュで扉を封印したいけど、ほぼほぼ確定した絶望に身体が言うことを聞いてくれないし、頼みの千冬は胸の前で腕を組み、絶対に見るまいと力強く瞼を閉じて絶対防御の構えに入っている。またの名を現実逃避。鋭い攻撃を売りにしていた現役時代からは想像できない戦法を取っている。

本当に諦めよう。

気持ちを定めて相対すればスローモーションが解除され扉が滑らかに開かれる。

「あ、貴女たちは!!」

作ってきたお菓子を食べ終え、物足りなさに市販のお菓子を食べていたレアヴェール

が勢いよく立ち上がる。ビスケット咥えたままなので締まらないけどレアヴェールらしいと言えばらしい。

「ハロハロハロー。ワタシが来ましたよー。アンダスタンドしたか君たちはー」

「五月蠅い。黙れ。静かにしろ

入ってきたのは二人。それも私たちが危惧していた二人が来てしまった。もう狙ってんじゃないかってくらいにクリーンヒット。学園長の悪意を感じてしまう。

遅刻したことを認識していないのか我が物顔で椅子に座る元アメリカ代表のリスト・バンダンガン。モンドグロッソ四位を記録している凄腕だ。

「国家代表が采配振るう特別レッスン。きっとレジェンド的に語り継がれることだぜー」

大口開けて笑う姿は裏表がなく素直にそのまま生きている。着飾ることをしない為に人を選ぶところがあるけど悪い人ではない。問題は面接に手作り菓子を持って行った私以上に常識が欠落しているところがあるところだ。

「ねえねえレジェンドになれる気持ちを聞かせてリッスン。マハルにチフユに……誰だっけー」

「レアヴェール・エムロード!!　私は最強なの。伝説になれる人なの。貴女みたいな銃しか能のない単細胞でも覚えられるほどの偉大な人間なのよ!」

そして無邪気なんだけど容赦なく人を撃つ。言葉の弾丸が相手の四肢を抉って悶えさせる天才でもある。リストと接するなら弾丸を通さない高性能な防弾チョッキを身に着けるがよし。貫通はしないから。衝撃は吸収しきれないけど貫通はしないから。

レアヴェールがぎゃあぎゃあと騒ぎ立てて抗議するのだが、リストはそれよりもテーブルのお菓子に意識が奪われていた。

「五月蠅い。黙れ。静かにしていろ」

そしてもう一人。レアヴェールの頭を掴んでテーブルに押し付けて黙らせた元カナダ国家代表のカエデリア・ロイ。モンドグロッソ三位の実力者。見上げないといけないほどの身長の持ち主で、私とか千冬が横に並ぶと親子みたいな身長差になる。最近育ちざかりで背とシスコン具合ばかりが大きくなっている一夏よりも身長が高い。たしか１９０センチだったか。とにかく目を引く大きさだ。何を食べればここまで大きくなるのか。

リストの隣に座ると幾分かは縮むんだけど、そもそも大きいのでやっぱり目立つ。

「いつからお前が最強になった。伝説など夢のまた夢だ。せめてその大口に実力がついてきてから喋れ」

「うむむぅ。デカいからいい気になるんじゃないわよ!!　私もそれくらいの身長があればねじ伏せてやるのに」

「ない物強請りなどみっともない」
「だってないんだもの。強請りたくもなるわ」
「二人とも……いいや、レアヴェールのみ落ち着け」
「なんで私だけなのよ。どぉー見たってこの山女の方を落ち着けるべきじゃない。私のは正当な抗議よ」
「ないな。正当性は」
「トゥルーなんてないのー」
「何度も言わせるか。五月蠅い。黙れ」
　場を乱しすぎだよ。
「私を乱す貴女たちの言うことか!!」
　どうでもよくないけど特別授業の準備時間なくなっている。もうお昼だ。ご飯の時間だ。
　腹が減っては戦はできぬ。食事は一日の活力になるのだから三食きっちり食べないと体がもたないし不健康まっしぐら。
　それにお腹空いている時に考え込んでもいいアイデアなんて浮かばない。空腹に思考の一部を取られてしまっている状況では効率は落ちる一方だ。
　せめて甘くて美味しいものでもあればいいんだけど、私の持ってきたお菓子は全部レ

アヴェールのお腹の中に納まっちゃったし、テーブルの上にある市販のお菓子は塩味が効いているものばかりで私が求めている甘味タイプじゃない。
「あれ？　アリーシャ・ジョセスターフは？　このメンバーを考えるにいてもよさそうじゃない？」
　確かに。この場にいるのは疑問を口にした五位のレアヴェールに、四位のリスト、三位のカエデリア、そんでもって棄権はしたけど一位の私。同じく決勝戦を棄権した同率一位のアリーシャも呼ばれてもいいはず。
　もしかして依頼するの忘れてたのかな。それとも講師料金払えないとか。
「アイツなら今は京都だ」
　何故に京都。まず日本にいたんだ。
「なんでも京都の隅々まで観光中だから行きたくないとか言ったらしい」
「フリーダム。アリーシャはウインドのようにフリーダムなのー」
　……さすが元国家代表だ。強い。

怪しい雲行き

ＩＳ学園初の外部講師を呼んでの特別授業は成功した。

前途多難な準備段階を経た割には授業自体は真面に進んでいったのは講師として招かれた三人の元代表たちが思いのほか優秀な指導者だったためか、受ける側の生徒たちが癖のある元代表たちの指導を上手く理解してくれたためか、はたまた奇跡に奇跡が重なった結果チグハグなままでも空中分解することなく目的地に向かっていったためか。

授業はトラブルなく進んでいるので、きっとレアヴェールたちが普段と違って指導者としての素質があったからだと信じることにした。

例えば、レアヴェールは手取り足取り分かりやすい言葉を心掛け、失敗にはきちんと問題点を挙げると共に改善のアドバイスを与え指導している。生徒の力量を見極めて個々に見合った指導を行う姿は指導者のソレであり、生徒たちの顔も活き活きとしていた。問題はマンツーマン型の指導方法であって集団指導には向かない点であること。そしてレアヴェールがそれに気が付けてないことだ。

例えば、リストは擬音と身振り手振りだけの指導を強行しており、生徒たちの感性に頼りきりになってしまっている。テンション高く「バーン」とか「クルッ」とか言われ

ても分からない。そして身振り手振りも擬音と全く合致していない為につまり何が言いたいのか全く理解できない。私にも分からないし、千冬にも分からない。生徒たちも分からないまま雰囲気だけを頼りに頑張っている次第だ。可愛そう過ぎて何も言えない。

例えば、カエデリアは説明を簡単に行ったのちただ実践あるのみとアドバイスもなく模擬戦の最中に肉体言語を以て指導。ちなみ今は瞬時加速の訓練をしているのだけど、ただただカエデリアは生徒に襲い掛かって、生徒が必至に逃げているだけにしか見えない。追いついてはボコボコにして、逃げ出せばまた追いついてボコボコにする。恐怖の中で瞬時加速を習得して逃げられた生徒もいれば、逃げられずサンドバッグ扱いを受ける生徒もいる。あれが指導だとすれば現代のコンプライアンスに著しく引っ掛かる危険なやり方だ。

そう結論だけ言うと、この特別授業は成功とは真逆の失敗の烙印を押していい状態だ。唯一の救いは大失敗じゃないってことくらい。ありがとうレアヴェール。貴女が真面じゃなきゃ大失敗待ったなし。

酷い有様を見せる授業風景にここが本当にエリート校なのか疑問を抱いても不思議じゃない。そもそも上層部の人選ミス甚だしい。絶対にもっと教え方の上手い人がいたはずなのに、よりにもよって指導力不足の人間を二人もつれてきちゃったのか。

見て見ぬ振りして自分の元に集まった生徒たちに指導を続ける。と言っても実はローテーション式の授業なのでこの子たちも次にカエデリア地獄を体験することになる哀れな生徒に過ぎない。

だからこそ私は彼女たちが無事に生き残れるように防御について教えている。防御は最大の攻撃なり、とかは信望してないけど防ぎ切ることは大事だ。

防御の際の体勢や構え方、いかに衝撃を流せるかを中心に指導している。普段は整備科の教師として、今日はＩＳ戦での防御の仕方について、元代表にしては消極的な授業内容だと、生徒の一人に言われてちょっと傷ついた。どっちも大事なのに。

確かに回避と攻撃を華麗にこなす千冬に比べれば、私は防御をメインにしているからあまり華のある戦いじゃない。

強いんだけど地味。

華がない。

塩試合。

ハイスピードバトルに謝れ。

世間様からの評価は辛辣の一言。泣くぞコノヤロー。

華々しく戦えば勝てるのかって言いたくなるけど、世間はエンターテイメント性も求めるから大変だ。

午後から始まった特別授業も残り３０分となった。長期戦となった授業に生徒たちも疲労の色が隠せない。体力のある代表候補生たちでさえ肩で息をしている。

少ない時間と疲れ切った生徒たちを前にして残りはちょっとした講義で終わろうかと千冬が提案してくれたのにカエデリアからの横槍が入る。

「せっかくだ。元代表の実力を見せてやろう」

ギロリと獲物を狙う目を見せる。それも私に。

「オッケーオッケー任せてよー。バトルで私たちの実力をガールたちに見せる。そして私は万春をプレスしちゃうからー」

興味ある玩具を見つけた目を見せるリスト。それも私に。

「目指すべきものが何であるかを指し示すことも大事よね。最強と名高い私の実力を世間という光に晒す時が来たというわけなのよ」

何を言っているんだコイツはという視線を浴びるレアヴェール。それも生徒からも。

あれ、凄い面倒なとこに転がり始めている？

それそれ　試合開始

「おもしれぇことになってきたじゃあねえか!!」

ＩＳ学園特別授業。

元代表を特別講師として招いて授業を行うそれは、元とは言えど代表の指導を受けられかつ実力の一端を肌で感じることができる機会となった。

一般生徒ならば滅多にお目にかかることのない代表の指導も、代表候補生からしてみればそこまで珍しいことではない。

だからこそ特別授業そのものは大した内容ではなかったのだが、今はその評価を改めてもいいかもしれないとダリルは思った。

二年生屈指の実力者である彼女からしてみれば所詮は一年生の受ける授業レベルでしかなかったものが、滅多に見られるものではない代表同士の試合へと発展していったのだ。心躍らずして何が代表候補と言えようか。

特に世界最強の称号を持つ織斑万春の戦闘は、教師と生徒の間柄をしても抑えが効かずに何度も打診していたダリルからしてみれば羨ましいの一言だ。

今すぐにでも飛び出していって参加したい。

そう思っているのはダリルに限らず一年生の代表候補たちも同じだった。
「国家代表同士の戦い。滅多なものじゃないわね」
楯無が興味津々と声を弾ませる。
隣に腰掛け不敵な笑みを浮かべているが、彼女はさきほど語彙力の欠ける指導を受け疲れ切っていた。さすがの生徒会長様も感覚勝負の指導に打ち勝つことができなかったようだ。
「すごいっスね。どっちが勝ってもおかしくないんじゃないっス」
フォルテが頬杖付いたまま喋る。興味があるのかないのか傍からは分かりづらいが、彼女の恋人であるダリルには興味深く目が離せないことが手に取るように分かる。
「片方は世界最強です。公式戦での敗北経験がありませんから他者を圧倒する力を持っていると考えるべきでしょうか」
サラ・ウェルキンが淡々と述べる。最近になってつるむ様になったイギリスの代表候補。彼女もまたダリルたちと同じように万春に戦いを挑むも取り合ってもらえない者で、それが縁で仲良くなった。
「しかし多勢に無勢という言葉もあります」
虚は興味よりも心配の色が強い。このメンバーの中で最も万春と付き合いがあるが故の不安だろう。

これから行わるのは元代表たちによる模擬戦。それも一対一の普通の模擬戦ではない。

二対三の複数戦。ＩＳでの戦闘が一対一を基本としているために模擬戦と言えどあり得ない戦闘方式にこの試合の行方を掴める者は一人としていない。

片や世界最強の織斑万春と日本の補欠代表である織斑千冬の織斑姉妹ペア。

片や世界三位カエデリア・ロイ、四位リスト・バンダンガン、五位レアヴェール・エムロードの多国籍チーム。

数の上では多国籍チームに軍配が上がるが、実力では世界最強を抱える織斑ペアの方が勝っている。

後は各チームの連携が勝敗を分ける。

フィールドで相対する五つの姿を見る。

カエデリアの提案が形になった試合を万春は難色を示したが、四人の説得を受けて渋々承諾したのはほんの少し前。自分たちではいくら訴えてもかなわなかった試合を、元代表たちは難なく実現させた。

羨ましい、とダリルは思った。

ただ、羨ましいという思いは模擬戦がスタートすると共に吹き飛んでいった。

動き出したのはレアヴェール。試合開始の合図が鳴ると同時に万春へと飛び掛かっ

た。恐れを抱かない突進は彼女と万春の前に割って入ってきた。
レアヴェールと千冬がぶつかり合い、その間にカエデリアとリストが左右から万春へ攻撃を開始する。
「……甘えな」
戦闘を見るダリルがぽつりと呟く。目の前の攻防が代表候補生でしかない自分たちでは演じることのできない次元のものであると気が付いてしまった。

モンドグロッソ五位フランスの元代表レアヴェール・エムロード。
第二回モンドグロッソにてワンオフアビリティを発現させられない国家代表の中で一番の実力者と名高い選手だ。
マシンガンと細身の剣で踊るように戦う姿は彼女の容姿と相まって非常に美しく魅せられる舞であった。
対するは補欠代表とどこか煮え切らない立場に甘んじていた織斑千冬。
姉である万春に国家代表の立場を任せ、万が一に備え続けたまま表舞台から姿を消した幻の代表と呼ばれた彼女は、他国の元国家代表を相手にしても引けを取ることはなかった。

武器はブレード一本。近接戦闘のみで戦い抜く姿はブリュンヒルデと呼ばれてもおかしくないのだが、生憎なことに彼女は一度として万春に勝つことはできなかった。
そもそも勝てるわけがない。
細身の剣が軽やかに舞い迫る中で千冬は笑みを浮かべた。
千冬と万春とでは持っている力があまりにも違い過ぎる。千冬が人間として最高の力を持っていると仮定したならば、万春は人間を超える人外の近荒を持っていると言える。人間が人間以上の何かに勝つことなど到底できない。
「補欠なんて及びじゃないの!!　おとなしくそこを退きなさい」
戦績を鑑みればレアヴェールの発言はおかしなことではない。
見下されていることに感情を荒立てることもなく千冬が細身の剣を弾く。
「退かしてみせろ。私を倒せなくば万春に挑むなど到底不可能だぞ」
売り言葉に買い言葉。千冬の挑戦的な言葉にレアヴェールが顔を真っ赤にして吠える。
「補欠のくせにして。専用機もなく訓練用の量産機で大きく口を開くんじゃないわよ!!」
「さてな。案外、万春に劣らないかもしれないな。量産機と侮らない方が身のためだぞ」
五位が補欠を侮っているのは態度で知れる。聞けば誰もが察することのできる事実。

しかし、補欠は万が一の代用であるが万が一であるが故に時機が来ても他国と遜色なく戦える人間でなければならない。

織斑千冬は確かに万春に何かあった時の代打でしかなかったが実力はそこらの代表を凌駕する。万春がいなければ代表となっていたほどだ。

セカンドシフトしたＩＳにたかが練習機が牙を向けるのは乗り手の実力性能差をカバーしているからである。つまりは実力はレアヴェールよりも千冬が上だということだ。

留まることなく繰り返される攻防は少しずつではあるが千冬に傾きつつある。

「ん!?　んんぅん!!　多少はやるのね。ちょぉっと見くびっていたことは否定できないわね」

ちょっとどころではない焦りの色を顔に滲ませたレアヴェール。余裕のよの字も見当たらない彼女の有様はすぐに余裕を取り戻して胸を張った。

「しかしね。あの頃の私とは違うの。今の私はスーパーレアヴェールよ」

「何を言うかと思えば。餓鬼みたいなネーミングだな」

「うっさいわぃ!!　最強の片鱗をこれから見せようって時に茶化さないでよ!!」

「あー、はいはい。分かったから最強の片鱗でも見せてみろ。どうせワンオフアビリティだろ」

「……なぜ分かったのよ!?」
「お前が単純だからだろう」
「人を単細胞みたいに言ってくれちゃってぇね!!」
「そこまで言ってないのだが」
「言った!!　私にはそう言っているように聞こえた!!」
振るわれる細身の剣は感情の爆発にブレブレで簡単に防げた。
レアヴェールは荒い息をしながらも少しずつ冷静さを取り戻し始める。
「良いわ。泣いて許しを請うても無駄。私の最強伝説の糧となるのよ!!」
「言ってて恥ずかしくないのか」
「いちいち言うなぁ!!」
そしてまた冷静さを失いかけた。
しかし腐っても元代表。
「ワンオフアビリティ発動!!」
言葉が大気を震わせる。
千冬の肌の上を風が滑っていく。
なるほど。自信に違わないモノが出てくるな。
強敵を前にして千冬は心の中で笑った。

やはり、生徒たちではこうも心震わせる展開にはならないな。

「攻楽闘戦(こうがくとうせん)!!」

千冬は敵を見失った。

それそれ　３＋４＋５は?

史上初のＩＳ世界大会モンドグロッソ。各国の代表が競い合い頂点を決める戦いの優勝者が織斑万春であることは世間一般的に周知の事実だ。

ただしそれは文面での事実。

織斑万春はブリュンヒルデとして君臨することになったのだが、その試合ぶりは各国の代表が自分の至らなさに自信を喪失してしまうほどの圧倒的な実力差で絶望を振りまくものであった。

次元の違う存在に各国は世界最強を打ち倒す人材の発掘に勤しむことになる。

国の顔となって世界に向かっていくのだから実力と品位が求められるは当然のこと。だが、実力と品位の両方を兼ね備える人材など早々見つからない。たとえ見つかったとしても世界最強に届くものでなければならない。

幾らかの国は代表にふさわしい人材を発掘していく中で、少数の国々は勝ちにいくことを求めて品位を犠牲にして代表にふさわしくない人材を発掘することに成功した。

彼女たちは他者を圧倒する才能を持ちながらも、人格面に大きな問題を抱える扱い辛い存在であったが、国の上層部は勝つためには目を瞑らなければならないこともあると

無理やり納得することにした。
そして品位を捨てた国辱とも成りかねない無頼たちは見事にモンド・グロッソ上位ランカーとして君臨することになった。
それでも織斑万春には及ばず。
眼前で行われる戦いの凄まじさに楯無は生唾を飲み込んで注視する。
世界三位と四位の二人が国境を越えた連携で絶え間ない攻撃を行う。
カエデリアは自身の身の丈の二倍はある巨大な斧を振り回し、リストは両手にハンドガンを持って対象に的確に攻撃を繰り出す。
巨大な斧は攻撃力全振りを表し、正面から受けてたとうものなら防ぎ切れずに防御したまま装甲を引き裂かれてしまうことだろう。少なくとも楯無には防ぐ手立てがない。真っ向勝負を捨てて回避に意識を割かなければならないだろう。
強力な一撃の合間に、ハンドガンによる銃撃が襲い掛かってくる。数撃てば当たるばら撒きではなく、一発一発が相手の装甲を抉り取らんと的確に飛来する。
しかし、織斑万春はその場を動くことなく迫りくる攻撃の全てを防ぎ切る。攻撃がどこから来ようが動じることなく適切な防御を展開していく。
世界最強。
ＩＳに携わる者であれば誰もが知る存在。当然ながら楯無も知っている。知ってい

て実力を肌で感じたくしつこく試合を迫ったのだが、この試合を見るに身の程を知らずにいたことを痛感させられる。

最強の盾。

鉄壁。

要害。

要塞。

不落。

織斑万春を表す言葉の数々は彼女の戦闘スタイルをよく表現している。

彼女はどんな戦いにおいてもひたすら防御を繰り返す。攻撃には防御を。一つの流れを忠実に守り相手の無力を知らしめるかのように防ぎ切る。

カエデリアとリストの苛烈な攻撃を前にしても淡々と盾を構える万春。

巨大な斧は逸らすように防ぎ、ピンポイント射撃は同じくピンポイントに弾く。それは挟み撃ちにされたところで変わらない。

楯無は冷静に判断する。

あそこにもう一人加わったところで切り崩しは不可能。実力が違い過ぎる。

あそこまで強いとは。万春のＩＳが性能で劣るためにスペックだけで少しは爪痕を残せると思ってしまったことは、暗部組織の人間として致命的な判断ミスだ。

楯無はちらりと隣人たちの様子を盗み見る。

従者である虚はポカンとした顔で万春を見ている。さきほどまでの不安が見当違いなものであることは確かだ。

先輩であるダリルはイライラしている。何にイラついてるのか楯無には判断できないが、時折「冗談じゃねえぜ」とか「馬鹿なんじゃねえの」とか言っているので誰かが原因となっていることだけは分かった。

同学年の友人フォルテは試合の様子を怠いと言わんばかりに半眼で眺めていた。未来視がなくても試合の結果が分かりそうな状況となると興味は薄れるというもの。塩試合と言われても言い返せない。

同じく同学年の友人サラは冷静に試合を観察している。冷たいとも取れる感情の薄い相貌はここにきても変化はなく内情が全く読めない。

楯無が視線を戻すと試合に変化が起こっていた。

強いことは知っていた。

伊達に世界最強の椅子に座っていたわけじゃない。高々数年経過しただけでは劣ること知らずに猛攻を防ぎ切っている。

油断していたわけでも侮っていたわけでもない。

カエデリアは高揚する気持ちを制御できずにも冷静に考えることもしていた。残念なことに気持ちと思考は別々に行動してしまっているが。

冷静なカエデリアは思案する。

世界ランキングでは三位と二つも位で負けてはいるが、引退してＩＳ学園の整備科教師として勤務するに留めＩＳの訓練もおざなりになっていたであろう万春に、いつか地につけてやろうと選手として引退してもなお自らを鍛え続けてきた自分。少しは劣ってもいいはずなのに、彼我の実力差が少しでも埋められていてもいいはずなのに。世界最強の壁は劣化することなく聳え立っている。

かつてと違い状況は二対一と数の上では有利であっても防御を打ち破れない。綿かなんかで鉄を叩いている気分にさせられる。不毛と嘆きたくもなる。

しかし、絶好調な気持ちよさで斧を振るうカエデリアは超えるべき壁の堅牢さに沈むどころか気持ちは鰻登り。なんとしてでも防御をぶった切ると鼻息荒く猛攻をかけていく。

万春の打鉄の持つ鉄壁の守りは易々と突破できるものではない。

打鉄は万春の戦闘スタイルを十全に発揮できるＩＳなのだ。

両肩のアンロックユニットの盾は万春を隠せるほどに大きく側方を十分にカバーできてしまう。両腕にもまた小型の盾が装着されていて、化け物クラスの反射神経と弾道

予測により迫りくる全ての攻撃を弾き返してくれる。

ただの盾であれば防御を打ち崩す攻撃で楯をぶっ壊せばいいのだが、生憎なことに打鉄の盾はそんじょそこらの盾とは強度が天と地ほどの差がある。異常な耐久性はカエデリアの全力で振りかぶった斧にも傷がつかない。そもそも今までにも打鉄の盾に傷がついたところをカエデリアは見たことがない。それほど硬い盾だ。

防御型を売りにしているだけあって盾の性能は一級品というわけだが、それに反するように機動力は並みのＩＳを大きく下回るほどに低い。カエデリアのＩＳの低速域が、万春の打鉄の高速域となってしまうほどに鈍足で車よりも速い程度でしかない推進力は高速戦闘を主にするＩＳでは致命的な弱点となる。

とっても硬いが救いようのないノロマ。

だからこそ、あの打鉄は鈍足を補う為に大量の火器を装備している。武器庫と言っても差し支えないほどの銃火器を詰め込むだけでなく、詰め込み切れないものは両肩の盾の裏側に懸架し、武器をたらふく積む為に更に機動力や無駄な装置を削ぎ落とし、パススロットを無理矢理広げる始末。結果、大部隊と一戦どころか何戦かやらかせるレベルの継戦能力を獲得してしまったのだ。

しかし現在、万春は盾で攻撃を防ぎつつ隙をついてハンドガンで反撃するだけと、高火力を以て勝利を手繰り寄せる気配を見せない。

相変わらずチマチマした戦い方だ。
圧倒的な攻撃力で豪快に攻め立てるカエデリアとは大違いだ。
「カエデリア。苦戦しているじゃないの。やっぱり最強である私をなくしては万春の防御を打ち破ることはできないのよ」
どうやってか千冬を倒したレアヴェールがどや顔で合流してくる。
「勝ったか。番狂わせだな」
レアヴェールは決して弱いわけではないが千冬の方が圧倒的に強い。せいぜい数分くらいは足止めできればいいか程度の認識で放っておいたカエデリアだが、さすがに勝つとは予想できなかった。
「番狂わせ言うな!!」
「番狂わせだよー。だってチフユはストロングだ。ワタシならともかくレアヴェールじゃインポッシブルだもの」
「リストも言ってくれるじゃないの。でもでも勝ったのは私よ。事実は事実として真実も真実として受け止めなさい。私が最強であることを。私のワンオフアビリティも最強であると」
胸を張って声高々に宣言するレアヴェール。気のせいか戦いの熱が若干冷めた気がしないでもない。とりあえず観客席は確実に白けた。

「そういえばチフユは練習機の打鉄を使っていたねー」
「そりゃあ勝てなきゃ不味い。専用機と練習機でならばな」
「ワンオフも使ったみたいねー」
「練習機相手に専用機でワンオフも使っちゃあ勝てるな。勝てなきゃ無能もいいとこだ」
「でもさ。そこまでやんなきゃ勝てないのは駄目じゃないの」
「だな。やっぱりお前無能だ。おい無能。いますぐ特攻して死んでこい」
「言いたい放題言ってんじゃないわよ!! どうせ嫉妬でしょ。最強の私の最強のワンオフに嫉妬してんでしょ。見苦しいのそーゆーの」
両腕を振り回して叫び散らすレアヴェールを無視して、カエデリアとリストは戦闘を再開する。遅れてレアヴェールも参戦するが、三人寄ったところで万春に傷を負わせることはできなかった。
「硬いけど。あの時の本気じゃなかった私と違ってぇ!! 今の私は本気の本気で挑んでんのよ!! 勝てると思わないこと!!」
マシンガンと細身の剣を巧みに操っての攻撃も万春の防御は崩せない。機動力で翻弄しようにも背中を取ったところで反応されて防がれる。
業を煮やしたレアヴェールは早々に切り札を切ることにした。

「ワンオフアビリティ発動!!」
千冬を打ち倒した力。
「攻楽闘戦!!」
それを見たリストもまた切り札を盤上に出すことを決めた。
「ワンオフアビリティ発動!!」
口角を釣り上げ恰好の獲物を見つけたとばかりに叫ぶ。
「弧陣弾骸再番!!」
二人が切り札を出す中でカエデリアは極めて冷静に状況を見定めた。レアヴェールのワンオフがどのようなものか分からないが、リストのはチーム戦においても使い勝手のいいワンオフだ。しかし、自分のワンオフはあくまで一対一を前提としたワンオフでチーム戦では仲間を巻き込む恐れがある。切り札を使えばもしかしたら一矢報いることもできようか。しかし、この状況では仲間の動きを悪くする危険性がある。どうするべきか。
冷静に冷静考えた末にカエデリアはいつの間にか重くなっていた口を開く。
「ワンオフアビリティ発動」
考えるのは捨てた。
「巨刃ノ刃!!」

そして彼女たちは全力で負けにいく。

それそれ　３＋４＋５＝１には遠く。

ワンオフアビリティ。
セカンドシフトしたＩＳが発現する特殊能力。現代技術ではあり得ない超常現象を引き起こすこともあるＩＳにおいての奥の手だ。
それを三人の元国家代表たちが惜しげもなく振るう。
攻楽闘戦。
レアヴェールのＩＳ性能を劇的に向上させる単純な強化型のワンオフ。何倍にも引き上げられたＩＳは常人には捉えることのできない速度で接敵し、瞬く間に装甲を切り裂いていく。追いつくことなどできずに無力化されていく敵は埋められない性能差に絶望し敗北の堕ちていく。
レアヴェールは格上を前にして自らのワンオフを使用し、そして圧倒的性能差を見せつけて倒した。いくら織斑千冬が相手であろうとも負けることなどないのだ。
しかし目の前の織斑万春という名の要塞を前には圧倒的性能差で挑んだところで決定打を与えられないでいた。
瞬時に背後を取っても相手の反応も早く防がれ反撃を食らってしまう。勝っている

はずなのに勝てない。性能は天と地ほどの差があるはずなのにだ。
「私が最強なんだって言うのに!!」
それも攻撃を加えているのは何も彼女一人ではない。
弧陣弾骸再番。
一度放たれた弾丸に再び推進力を与えて攻撃するリストのワンオフ。弾丸の射程距離を伸ばし、軌道を変え、そして地面に打ち捨てられた弾丸を再利用できる。
リストの放った弾丸は相手の意表を突くかのように四方八方から襲い掛かる。軌道を変え側面から背後から頭上から足元から、とにかくあちこちから殺到する弾丸の嵐も要塞のガードを吹き飛ばすことができない。
レアヴェールの攻撃に合わせて防げないタイミングで銃撃しても結果は変わらず。
「モンスター。何が何でもハントしてやるよー」
ならばと振るわれるのは巨大な刃。
巨刃ノ刃。
振るった武器を巨大化させるカエデリアのワンオフ。振るわれたその時だけ武器を巨大化させる予想外の一撃は巨大化に相応しい攻撃力を以て敵を撃墜することができる。そもそもカエデリアの攻撃力自体が代表の中で飛びぬけている中で、それをワンオフでさらに強化しているのだから防げる奴など万の中から探したところで見つけ出す

ことはできない。
ただし万が一という言葉を体現するかのように要塞は質量の化け物を受け止める。押しつぶすこともかなわずに受け止められた一撃は、目の前の存在が人間の範囲から逸脱してしまっていることを嫌が応にも知らしめる。
「織斑万春のうすのろ野郎!!　どうせなら私の実力を輝かせながら負けて見せろ!!」
レアヴェールの機動力も、リストの奇襲も、カエデリアの攻撃力も、三人合わさったところで万春の防御を揺るがすことはできない。
試合を見守る虚は尊敬する万春の実力に喉が渇いていくのを感じていた。
モンドグロッソを二度も代表として出場している万春が強いことを頭では分かっていたが、実感したのは目の前の暴力の嵐にも揺るがない姿を見てだった。
織斑千冬を砂糖で煮込んだ甘くホッとする雰囲気も、耳に心地よく入り込んでくる音量不足の声も今見えるソコにはない。
感情の一片も張り付いていない無表情の顔に心の内を悟らせることのない不変の瞳。面で全てを覆い隠しているのか、それとも顔を取り換えたのかと錯覚してしまうほどの別人の顔がある。
人間らしさの欠片もない。
あの猛攻を前にしても焦りの一つ見せないのだから、同じ人間と判断することを躊

躇ってしまう。いっそ人間を模っただけの化け物と言われた方がしっくりくる。
ああ、駄目です。そんなことを思ってしまうなんて。
頭を振って恩知らずな考えを吹き飛ばす。お世話になっている人になんてことを考えてしまったのだろうか。
あの人は人間だ。それは間違いない。だって作ってくれるお菓子は心が温かくなる優しいものなのだから。
いまだ嵐の中で体勢を崩さずにいる万春が遂に明確な攻撃を開始する。
背後を取って細身の剣で突きを繰り出すレアヴェールの腕を掴んで引き寄せ、リストの操る弾丸の前に差し出してヒューマンシールドとして活用し、カエデリアの振るう斧に向かって投げ飛ばしてたちまち戦闘不能に追いやってしまった。
「やるぅ!!」
リストが満面の笑みを浮かべて銃口を向ける。両手に構えた銃から撃ち出される弾丸は当然ながら鉄壁の防御に阻まれ届かず。
万春はお返しとばかりに肩のシールドからアサルトライフルとサブマシンガンを取り出して攻撃をする。
マシンガンが牽制しアサルトライフルで確実にダメージを与えていく。万春と違い盾で防ぐということをしないリストは回避に徹するが、未来が見えるのか回避先を読み

取った射撃を前にしてリストは被弾していく。
「構え!!」
カエデリアが斧で接近戦を仕掛けるが、瞬時にショットガンに切り替えた万春に近づけずそのままリスト共々ハチの巣にされた。
実際に見てみると呆気ない戦いだった。
少なくとも虚にはそう思えた。
白熱した試合運びではなかった。どこか物足りなかったとも言える。
なるほど。確かに盛り上がりにかける塩試合だ。
前半防ぐだけ防いで後半でさっさと片づける。手に汗握る試合とは程遠い。
「でも万春先生が勝っただけよしとしましょうか」
それでも虚はちょっとだけ誇らしく思った。

織斑姉弟

家に帰る。

ＩＳ学園勤務となって以来、家に帰る回数は減少傾向にあることはＩＳ学園の勤務体制がそうさせているからであって、決して私が家に帰ることを拒否しているからじゃない。

家に帰ることは決して嫌いじゃない。やっぱり慣れ親しんだ家が一番心が安らぐ場所なんだ。嫌いになれるはずがない。

千冬も千冬で帰路につくと表情が段々と柔らかくなっていく。学園内では教師の威厳を保たなければならないようであまり気を抜いた顔は見せてくれない。

しかし、ブラコンな千冬は家にいるであろう一夏に会えることに期待を膨らませているのか気を抜き過ぎて見ていられない顔に変貌しつつある。コイツを慕っている生徒が見たらショックで倒れんじゃないかってくらいに原型のない顔だ。ドイツにいたボーデヴィッヒが見たら、私の知っている教官じゃないとか言って絶望しそうだ。

私は特になんともない。千冬と違ってそこまでブラコンじゃないから。

このブラコンは自分の目が黒い内は彼女だって作らせんと意気込むほどに末期。挙

句に私を倒せるほどの女じゃなきゃ安心できないとか言う始末。誰なら一夏と付き合えるんだろうか。

「夕食はなんだろうか。アイツの作る飯は美味いからな」

千冬の言う通り。一夏は私と千冬が早くから働いていたこともあって家事を一手に引き受けっ料理の腕前はそこらの主婦にも負けないレベルに到達している。本来ならば遊び盛りの年齢だっていうのに、私はお菓子しか作れないし千冬に至ってはレンジで調理するインスタント食品しか作れない駄目なものだから一夏が台所を占拠するのは自然の摂理とも言える。

張り切って作るとか言ってたけど。

「それは楽しみだ。暫く仕事が捗る」

足取りも軽く遂には変えるべき家へとたどり着く。

千冬に急かされて中に入れば、奥の方からどたどたと慌ただしい足音が近づいてくる。

「お帰り、万春姉に千冬姉!!」

出迎えてくれるのは最近逞しく成長をし始めた一夏。コイツも大概シスコンなので手に負えない。

「帰ったぞ」

ただいま。

千冬はさっきよりキリっとした表情を見せる。一夏の前だとカッコいい姉でいようとするので素直に接することがし辛くなっている。それなのにブラコン。自ら作り上げた姉像が邪魔をしているのは皮肉と言わざるを得ない。

私からしてみれば一夏は可愛い弟だけど、ブラコンほどの情愛まではない。そこまで偏っているつもりはないのだ。多少甘めなのは確かだけど。

「ちょうど夕飯も出来上がったんだ。手を洗ってきてくれよ」

言われるがままに手を洗ってリビングに向かえば、テーブルにはところせましと料理が乗っかっていた。バリエーション豊かな料理は全部一夏の手作り。多少は手を抜いて総菜を買ってきてもいいのに。

一夏なりの労いだろう。

そう思いつつも早速食事開始。

まず気になったピザに手を出してみる。

「初めて作ったんだけどどうかな」

感想を聞きたくてそわそわしている一夏。

はっきり言ってピザは美味い、そりゃあ本格的な店のピザに比べると劣るが、家庭で作るピザであれば十分すぎる。

問題は家庭で作るピザなはずなのに竈できちっと焼いて作ったことだろうか。
家にピザ用の竈があるって普通に考えればあり得ない話なんだけど、ウチのブラコンが本気を出せば普通なんてぶっ飛ばして用意できてしまうのだ。
一夏も一夏でピザを焼いてみたいなんて口を滑らせなきゃ千冬が動き出すことはなかったんだけど、耳に入ってしまった以上は仕方がなく千冬が給料を惜しげもなく投資して竈を作り上げたのだ。
素人なはずの一夏もどうやってか竈を駆使してピザを焼いてしまうし。
一夏の将来は料理関係の職にほぼ決まりな気がする。
「美味いな。腕を上げたじゃないか」
千冬がクールな感想。自分の調理スキルの限界を悟った女のセリフとは思えない。
腕を上げたという感想には賛成だけど。
やっぱり料理人が将来のビジョンかな。
高校受験を控えているはずなのにピザ作っているんだから。
中学三年生として進路を考えなきゃいけない中で、一夏は中学卒業と同時に働こうとしていたみたいだけど、さすがにそれは千冬が阻止してくれた。せめて高校は出ろと。
一夏としては少しでも私たちの負担を減らしたいと思っての決断だったけど、別に一夏のことを負担と思ったことはないし稼ぎだって悪くないので進学資金はいくらでも

出せる。

一夏は千冬に逆らってまで就職を求めたんだけど、最終的には説得（物理）を受けて進学することに決めてくれた。

せっかくチャンスがあるんだから進学するべきだと思う。機会を得られない人もいるのだから、目の前のチャンスを十分に活用してほしいのが姉心だ。

だから高校三年生になって就職と意気込むだろうから、今度は私が大学進学の道を照らしてあげることになるだろう。

もちろんその時も最終的には説得（カナディアンバックブリーカー）で解決することになるだろうけど。

それはまた先の話として今は目の前の問題に答えを出すことにしよう。

美味しいよ。

料理を作った側が答えを求めていることを知っているのだから。

秘密は甘く妖艶な響きに聞こえたり

整備室は今日も賑わっている。

変わらず整備科教師として訓練で使用されたＩＳを相手に奮闘する生徒たちの指導しているんだけど、今日はそれ以外の人間たちも顔を見せている。

楯無、ダリル、フォルテ、そして最近になって加わったサラ・ウェルキンはいつものことなので無視するとして、整備室に顔なんて出したことのないような生徒たちが集まってきているのだ。

誰もが世界最強の顔を拝んでやろうと言わんばかり。見られているこちらとしてはいい気分じゃないんだけど直接的に邪魔されているわけじゃないから無視しておく。

特別授業で実力の一端を見せてしまったのが原因だ。

名ばかりの世界最強と揶揄される私が格下と言えども元代表三人を倒したことで生徒たちの見方が変わったと思われる。

うん、こうなるなら負けときゃ良かった。

今更になって注目されても困るんだ。だったら最初から注目しろって。いいや、そもそも注目されたくないんだけどさ。

そして注目されない為であっても負けるのは無しだ。勝敗を決することのできる戦いじゃあ絶対に勝ちにいく。

私の生まれを鑑みれば勝てて当たり前なのだ。負けるなんて考えられないし考えちゃいけない。

勝てるから勝ちにいった結果が置かれている今の状況だ。何事も勝てば解決するわけではないと教訓になる。

とにかく無視だ。無視するに限る。

用もないのに整備室に集まって、せっかく放課後を使って整備の実践的な練習をしている生徒たちの集中力が乱れている。

はい、私以外に実害が出始めちゃいました。

仕方がないので千冬に連絡して引き取ってもらおうかと思ったけど、我慢しきれなくなった楯無が注意して追っ払ってくれた。

「よぉ。さすが生徒会長様。様になってんじゃねえか」

楯無の首に腕を回したダリル。普段が普段だからダリルに言われるまで楯無が生徒会長であることを忘却の彼方へと飛ばしていたな。

「様になってなきゃ一年で生徒会長できませんよ」

えへんと胸を張る楯無。そしてなぜか嫉妬混じりに目線を向けるフォルテ。

「羨ましいっス。ひっじょーに羨ましいっス」
「……望みを捨てる必要はありません。まだ大丈夫でしょう」
　フォルテの視線が求めている何かに気がついたサラが真面目な顔して慰めている。
「気軽に言えるのはサラが大きいからっスよ。強者の余裕が腹立つ。半分以上分け与えてみせるっス!!」
「無理を言わないでください。そのイヤらしい手の動きをやめなさい。それにダリルは気にせずにいるんですよね。ならいいじゃないですか」
「それとこれとは話が別っスよ。少しでも大きくありたい。女の子なら誰しも抱く願望っス」
「私は抱いたことありませんが?」
「戦争っス!!」
「なぜでしょう?」
　首を傾げるサラ。心底不思議そうにしているところがフォルテの導火線に火をつけたのは言わずもがな。神速の一撃と言わんばかりに殴りかかるが、体格差に抗えずサラに捕まって即終了していた。
　それを見た楯無とダリルが腹を抱えて爆笑していた。フォルテの言う強者の余裕がなせる技だ。

「いひゃひゃひゃ。それにしてもよ先生。ちょっと聞きたいことあんだけどさ」
何かなダリル。
「あんとき先生は一対三の状況にも関わらずワンオフ使わなかったじゃんか」
使うほどに追い詰められていたわけじゃないから。
「言うじゃん。結果が物語っているけど。それで素朴な疑問なんだけど、先生のワンオフってどんなのなんだよ」
「あ、それ私も気になりますね。万春先生の公式戦記録のどこを探してもワンオフ発動させるシーンがなかった。他の代表のワンオフは記録されているんですけど、先生のだけないと気になります」
互いに肩を組んだまま詰め寄ってくるダリルと楯無。
ワンオフアビリティ。セカンドシフトしたＩＳが発現する特殊技能で、普通なら不可能な事象を引き起こすことのできる一種の切り札に近い存在。
発現したワンオフはどれをとっても強力なモノが多く、戦いの流れを一気にひっくり返すのだが、残念なことにワンオフを発現させた者の数は二桁にも上らないし、そもそも最低条件でもあるセカンドシフトに至ったＩＳすらも少ない始末。
だから、モンドグロッソで大会上位者たちがワンオフ使える奴ばかりなのは当たり前とも言える。

私もご多分に漏れずワンオフは発現させている。そりゃあもうバリバリにワンオフの使い手でもあるんだけど、楯無が言うように公式戦でワンオフを発動させたことはない。

ワンオフ使わなくても勝てちゃうからね。二回しか使ったことないよ。

「……非公式戦でってことですか」

いいや、違うよ。試しに二回かな。

一回目は発現した時に。ヒカルノが作った新装備の試し撃ちの最中だった。

二回目は改めて、どんな効果があるかをヒカルノと調べるために。

その結果、現状必要としないワンオフであることが判明した。使わなくても勝てるので。

「気になる気になる気になります!!」

「同じくだぜ。教えてくれよ」

却下。手の内晒す趣味はないよ。

あんな反則級のワンオフなんて教える必要はない。バランスブレイカー過ぎて戦うのが嫌になっちゃうだろうし。

しかし、秘密にされると気になるのが人間だ。ダリルと楯無だけではなく、サラと彼女に抱きしめられたまま身動きの取れないフォルテすらも興味津々と熱い視線を向け

てくる。
　そんな目をしても教えないよ。
「減るもんじゃないだろ」
「そこを曲げて」
「教えてほしいっス」
「興味がつきません」
　四人の視線を受けるのも大変なので、私は整備を頑張っている生徒たちの指導を名目に逃げることにする。逃げるが勝ちだ。

私は面倒が嫌いなんだ

一年はあっと言う間だ。

二十歳過ぎると時間の感覚が短く感じられるというけれど、確かに一年が短く感じられてしまう。

楯無が入学してきたと思えばいつの間にか生徒会長に就任し、気が付けば二年生へとシフトアップしていくのだ。

一年とはかくも短いものか。

一年が終われば次の一年に向かって準備していかなければならないのはどこの誰であっても変わりはない。

整備科教師として二年に進学し整備科の道に進む生徒たちに何を教えていくか考え、新しく入ってくるであろう一年生にいかに整備が大変かを教え込まなければならない。

次の一年に向けて自分たちも新しい教材の用意をしていかなければならない中で、私と千冬の懸念事項は弟の進路だ。

一夏の進路事態は決まっている。藍越学園なんていうところに進学。なので進路そのものはオッケーなのだが問題は一夏そのものだ。

一夏は決して頭が悪いわけじゃないのだが、若干の楽観主義的な部分が根っこにあって油断して痛い目見るタイプだから最後の最後に大ポカして台無しにしそうで心配になる。

本人は勉強を熱心に頑張って進路は確実だろうとお墨付きをもらっているそうだが、私たちからしてみれば、いざ本番で受験票を忘れてはいかないだろうかとか、道に迷って受験に間に合わないとかないだろうか心配なのだ。

特に千冬は心配が過ぎて何故か酒に溺れる始末。酒に逃げるのはやめた方がいいと何度も言っているんだけど、全然治る気配を見せない。

私としては当日受験票の確認を厳とさせ、数日前に会場の下見に行くよう口酸っぱく言うしかない。

これじゃあ中卒で就職なんて絶対にさせられない。

しかし一夏ばかりに構ってられない。

ＩＳ学園も教育機関であるからには新入生確保の為に色々と忙しくなっている時期だ。特に毎年ＩＳ学園への入港希望者が多すぎて入試試験の会場確保や日程の調整などでてんてこ舞いだ。

幸いなことに私は関係のない立場にあるんだけど、千冬の方は駆り出されてしまっているから酒に溺れている暇なんてない。

そんなわけで私はのんびりと授業を行う日々だ。
授業はのんびりだけど身内の事情に心配だけが募る。
段々と一夏の受験日が近づいてきたが、本当に一夏は緊張感がないのか平常運転そのものだ。平常運転過ぎて流れで事故を起こしそうだ。

そして来る藍越学園受験日当日。
と同時にＩＳ学園受験日も当日。
聞けば楯無や虚の妹もＩＳ学園を受験するみたいで二人して心配なのかここ数日オロオロしていた。意外なのは自信満々の楯無がずっとソワソワしていたことだ。それほどまでに妹のことを想っているみたいだ。まぁ、妹の話になると暴走気味に饒舌になるのだから間違いはないか。
私は私でやっぱり一夏のことが心配になってきたので手作りのチョコレートを次から次へと口に放り込んで平静を保っている最中だ。
電話もして受験票をちゃんともったことを確認したけど、試験会場は昨今のカンニング問題を受けて前日まで試験会場が分からないとかふざけたことされてしまったんで、一夏迷子になるかも問題が一切解決されていない。
聞けば試験会場は藍越学園もＩＳ学園も同じところという偶然。

あの新進気鋭の有名デザイナーが常識を逸脱したオレのセンスが光るぜ的にデザインした複雑怪奇な建物が会場だ。あそこは初見殺しの建物だからきっと一夏は迷子になる。迷子になった挙句におかしなことになりそうだ。

姉として勘が警告してくるんだけど、これ以上はどうしようもないので何も起こらないことを祈るしかない。

というかアイツ滑り止めの高校とか決めてたっけ。

もしかして藍越学園一本だったりするか。

だとすればやばいな。滑ったらすってんころりんで取り返しがつかない。

たしか千冬の奴が男なら背水の陣で挑まんか、と変な発破をかけていた気がする。一夏のことだから真面目に捉えて滑り止め決めてない可能性がある。馬鹿な、背水の陣は敵に策がないと知っているから行うのであって、受験がそんなに甘いものではないというのに。

時既に遅しという言葉もあるのだから、諦めて一夏が無事に受験を乗り切ることを信じるしかない。それに千冬が合格祈願のお守りを大量購入して一夏に渡しているから大丈夫だと思う。

そう思っていたんだけど、暫くして千冬から電話がかかってきた。

なんでも一夏がＩＳ学園の受験会場に間違って入ってしまいＩＳを誤って動かして

しまったとのことだ。
ちょっと何を言っているのか全く分からなかったけど、千冬の方もかなり混乱しているようで聞き返しても有力な情報は得られず。
私に言えることは一つ。
本番でやらかすんじゃないよ。
とにかくそこからは大変だった。
何故なら動かせるはずのないＩＳを動かすなんて前例にないことをやってのけた男を、どこの国も放っておくわけがないから。
一夏の元へとやってくる人体実験のお誘いを千冬が頑なに拒み、私も私でしつこい人たちを追い返さなくてはならなくなった。
一夏の希少性故にあちらこちらから魔の手が伸びてくる中で、上の方で色々と議論がなされた結果、一夏はＩＳ学園にて保護されることになった。
無理な人体実験は行われないが、男性ＩＳ装着者のデータ取りに協力することになり、そのための専用機開発が始まった。
データ取りの専用機なので万能型のＩＳを宛がうのかと思いきや、ここでまさかのブレードオンリーな超近接戦闘タイプのＩＳだった。千冬の要望らしい。一夏の性格上あれこれと複雑に戦略を組み立てられる柄じゃないし、元々剣道をかじっていたことも

あるのでこれが一番らしい。

千冬が自慢げに語っていたので、きっと姉弟でお揃いにしたかったのだろう。千冬もブレードオンリーだったし。

そんな千冬の願望を形にしようとしたＩＳはいまだに形になってはいない。

日本のＩＳ制作トップの企業はヒカルノのところだけど全然上手くいっていない。世界がワンオフアビリティーの再現を目的とした第三世代型の開発を行っている。そんな情勢を日本が無視することはない。それに一夏の乗るＩＳにも注目が集まるだろうから、日本としては技術力の高さをアピールするチャンスでもある。

我が家の弟は厄介な世界に引きずりこまれたものだ。

ちょこっとだけ束の介入を感じないわけでもないが、私も千冬も更には一夏でさえも特殊な生まれであるからして、もしかしたらそれが原因でＩＳを動かすなんて七面倒な事態を引き起こしたのかもしれない。

どちらにしても一夏の件も面倒なことに違いないが、私にはまた面倒なことが舞い込んできている。

例えば、千冬がサプライズしたくていつまでも職場がＩＳ学園であることを隠していることよりも。

例えば、千冬がＩＳに関する情報を一夏に与えないようにしていたのが無駄に終わっ

たことよりも。

例えば、実はシスコンな一夏が隠れて私たちの選手時代の映像を見ていたので多少ＩＳについて知っていたことよりも。

例えば、一夏が家の掃除の最中でＩＳ学園から渡された大切な参考書を表紙を確認せずに捨ててしまったことよりも。

私に舞い込んだ面倒事の方が大きかった。

後進の育成に努めよ。弟子取れって無茶言うなよ。

姉として色々不安

ＩＳ学園はエリート校であると同時に女子校でもある。女尊男卑の蔓延る昨今の情勢もあって校内には男性の姿なんて学園全体の一割に過ぎない数しかいなかったりする。

ほぼほぼ女子の花園と化しているんだけど、この度私の弟が公的にＩＳ学園に入学することが決まったので、きっと今年は面倒な騒ぎが起こるんじゃないかと考察しておこう。

救いは私が担当クラスを持たない整備科の教員でしかないことか。千冬みたいに担当クラスを受け持って四苦八苦することはない。

しかしながら、担当クラスを持たないが故に私は生徒との触れ合いがちょっぴり少なくなる。それも二年生にもなると整備科に進む生徒としか接点がなくなるので二度と会わない生徒とかも出てくる。

つまりは弟との触れ合いも少なくなってしまうし、場合によってはほぼ会わない可能性も今後出てきてしまうわけだ。

そういう意味では千冬が羨ましい。担当するクラスに一夏がいるらしいから。と

言ってもあくまで厳格な千冬ならば弟だからと甘い対応はせずに他の生徒と変わらない厳しい教育を施すに決まっている。

でも公的な目に見える部分以外では案外甘いところのある千冬は、政府が用意するデータ取りも兼ねた一夏専用のＩＳの開発に口出ししていたりする。

千冬の暮桜の後継機と言っても過言ではない高機動近接戦闘型のＩＳ。千冬の要望がいっぱい詰まった欲に塗れ切った素敵なＩＳは倉持研究所で開発中だ。

なので倉持研究所は鬼気迫る勢いで働いている。馬車馬のように働いているんだけど、全然カワイソーには見えない。狂気を孕んだ笑顔を見たからかな。

対して、目の前で子供みたいに目を輝かせている篝火ヒカルノは健康体そのもの。ケーキを頬張り幸せそうな笑顔を浮かべているが、彼らと違って危険性は皆無だ。違いが気になっちゃう。

「いやー。頑張ってるねぇ。私にゃあ関係のない話なんだけどにゃあ」

ホールで持ってきたケーキが一定のスピードで消化されていくんだからヒカルノの胃袋の構造が気にならないわけでもないけど、作った身としては美味しく食べてもらえるのは嬉しい。

やっぱりヒカルノが一番美味しく食べてくれる気がする。

「千冬も罪な要求をするけど、政府の奴らも厄介な注文つけてくるよ。第三世代ＩＳの

開発に力を入れたいのは分かるけど、まさか千冬の零落白夜を再現しようったって無理難題すぎるにゃあ」

確かに。というかそもそもワンオフアビリティの再現事態が無理難題だと思うよ。理論とか無視して行われる超常現象みたいなもんだから。

「確かに。それでもさ、まはにゃんのワンオフならなんとか再現できそうじゃない。要は規模の問題なんだから」

規模。塵一つ残さず消滅させられるレベルの威力と量が必要になるよ。

「むずいね。やる気なくすにゃあ。まぁ、愛しのまはにゃんの力を他の奴に使わせる気はないけど」

話しながらもケーキは切り崩されていく。

量産型打鉄の開発という功績を持つヒカルノ率いる開発チームは世俗など知らないと言いたげだ。

本来ならば職員が一丸となって行うべき男性が装着する第三世代ＩＳの開発を、ヒカルノたちは傍観者としてノータッチ。

曰く、あくまで打鉄の為に集められたチームでしかないので、開発には参加する義務がないとのこと。

ちなみ私の打鉄をの整備やデータ取りの為に存在するようなチームだ。宝の持ち腐

れだ。
この場で最高の頭脳を持つヒカルノが参加しないためか開発のテンポは驚くほど悪い。
前人未踏の第三世代ＩＳの開発がいかに難しいものであるかを物語っている。
こりゃあ一夏が入学するまでには完成しない。厳しい現状だ。
「今ねぇ、上では篠ノ之束の手を借りようと必死にコンタクト取っているみたいだよ。正確には束と連絡が取れる可能性のある千冬に頼みこんでいるんだけど」
できませんでした、じゃあ駄目なの。
「駄目さ。世界で一人しか見つかっていないＩＳを動かせる男子。そいつのデータは喉から手が出るほど欲しい。日本政府としては絶対に放したくない人材だよ。他国からのＩＳ提供なんて横槍が入らないように急ぎ専用機を作る必要があるんだよ。それも他国よりも頭一つ抜きんでるような技術力を持ったＩＳをね」
技術力と希少な男子のアピールと他国の介入を避けたいわけか。
「へぼいの作って、こっちの方がなんて言われると危ないし、ウチとしても沽券に関わる話だから。まぁ、見てもらえば分かる通り無理っぽいけどにゃあ」
ヒカルノが手伝えばいいんじゃない。
「嫌だよ。私はまはにゃんのＩＳだけで手一杯だからにゃ」

と言っても定期的なメンテナンスとデータの解析くらいだけどね。

「苦労しております」

嘘だと分かる嘘だね。

「なぜバレたし」

なぜバレないとおもったし。分かっていってるからお互いになんもないんだけど。

一夏のＩＳは暗礁に乗り上げてしまったし、一夏自身もせっかくの受験勉強ばパーになった挙句に今度は全く知りもしないＩＳについて勉強しなければならなくなった。

すげー大変。

我が弟ながら苦労人だ。

ヒカルノはケーキを食べ終わって満足。私としてもホール丸ごと食べてもらえて大満足。

「でさ。一夏くんはこれからＩＳ学園に入学するわけじゃん」

そうだね。

「異性ばかりということは選び放題遊び放題。人生最大の春がくるんじゃないかにゃあ」

爛れてるじゃない。姉としてぶっ飛ばしてでも止めなきゃならない。

「そもそも一夏くんて好きな娘とかいるのかな。ほら……ええと……篠ノ之妹とかと仲

良かったって聞いたことあるけど」
仲良いけど。一夏は一片の恋愛感情を抱いたことないはずさ。箒も箒で恥ずかしがって恋心の塵すらも見せられないどころか、照れ隠しで暴力暴言三昧。
「そっか。じゃあ脈なしだ。それじゃあ、中華娘っ子はどう。チビの凰鈴音」
一夏がセカンド幼馴染と言って憚らない少女。元気いっぱいで見ていて気持ちが明るくなるけど、こっちもこっちで照れ隠しの暴力が凄すぎて進展どころかスタートにも立てていない。
そしてスタートに立てないままに帰国してしまったんだよな。お菓子喜んで食べてくれたからちょっと寂しい。
もういないよ。
「……もしかしてマズいこと聞いちゃったかにゃあ!?」
失敗。もう存在しないことにされちゃった。